

Asia-Pacific Young Leaders Summit Asia-Pacific Young Leaders Summit 2012

July 15-24 2012



麻布高校 筑波大学附属高校 下関西高校

Index

p1. APYLS

p3. Program

p6. Before The Summit

p8. What We Did

▶Day0 – Day11

▶Student Dialogue

p33. Presentation

▶Script

▶Explanation

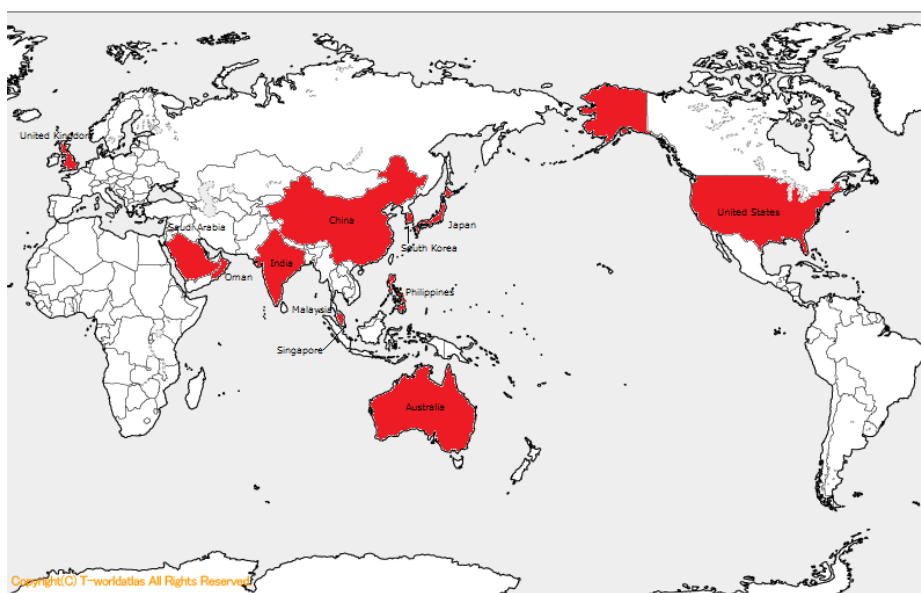
p40. Feedbacks

APYLS

僕たちが APYLS で経験した 2 週間はこれまで生きてきた 17 年間で最も素晴らしいものだった。日本という枠の外の掛け離れた環境で、世界のために自分が何をできるか、そのために何が必要かを学んだ。これは確実に僕たちの未来への礎となっただろう。僕たちがこの留学でどんな経験をしたのかをたくさんの人に伝えたいと思い、この文集を作成します。

APYLS (Asia-Pacific Young Leaders Summit)

太平洋を囲むアジアを中心とした 12 カ国（オーストラリア、中国、インド、日本、マレーシア、オマーン、フィリピン、サウジアラビア、シンガポール、韓国、イギリス、アメリカ）の高校から選ばれた生徒たちが、世界問題などについて議論することを通じてリーダーシップを学ぶプログラムである。毎年 7 月にシンガポールで開催され、今年では第 6 回目。太平洋を囲む国々に加えてサウジアラビアやオマーン、さらにかつてシンガポールが植民地だったイギリスが参加している。



開催国のシンガポールについて。地図のとおりマレー半島の先端に位置する小さな島国だが、その発展はめざましく世界経済においても重要な一国である。

シンガポールは主に中国系、マレー系、インド系で構成される多民族国家であり、この始まりはイギリスによる植民地支配の時代へと遡る。1819 年、当時人口わずか 150 人だったこの島にイギリス人のトーマス・ラッフルズが上陸し、地理的に便利なシンガポールはイギリスの植民地となった。その後イギリスのアジア貿易の中継地点やマレー半島で生産された作物の積み出し港などとして発展する中で中国やインド、インドネシアなどから多くの移民が渡来し、多民族国家となったのである。

この国が戦後の短い期間で急成長したことの要因としては初代首相李光耀(リー・クアンユー)の一党独裁政治による経済発展、また多民族国家のため英語が公用語であり国際化が容易だったことなどがあるだろう。

近年グローバル化が進む中、自然災害、人口、移民、汚染や食品衛生などかつて国ごとであった問題が世界中に広がりつつある。地球温暖化に対する先進国と発展途上国の意見が異なるように、それぞれの問題について一方的な策を取っていただけでは足りない。前例を考慮してそれらを良い方向へ持っていくことのできるリーダーこそが今世界で必要とされているのであり、APYLS はそれを目指す良い機会だ。



文責 野辺宣翔

Participants from Japan

麻布高等学校

酒井直

隈井亮太

野辺宣翔

筑波大学附属高等学校

和田大夢

山下鈴乃

多田誠之郎

下関西高等学校

河野凜

岡本千秋

金城美咲

Program

Day 0 – Day 2

	2012/7/15 Day0	2012/7/16 Day1	2012/7/17 Day2	
7:00	Arrival Changi Airport チャンギ空港到着 Check into Hwa Chong Boarding School ホワチョン学院チェックイン	6:00 Breakfast 朝食	7:00 Breakfast 朝食	
8:00		Opening Ceremony 開会式	*External Visit* ・Government of Singapore Investment Corporation シンガポール政府投資公社 ・A*STAR 科学技術研究庁	
9:00				
10:00		School Tours 学校見学		
11:00		Cultural Exhibition 文化交流会		
12:00		Lunch 昼食		
13:00				
14:00		City/Heritage Tour 市内観光		Summit Dialogue サミットダイアログ
15:00				
16:00				
17:00				
18:00	Dinner 夕食	Journal Briefing 打ち合わせ	Journaling 日記	
19:00	Mass Interaction Session 自己紹介ゲーム	Dinner 夕食	Dinner 夕食	
20:00		Cultural Night Preparation 文化発表会準備	Cultural Night Preparation 文化発表会準備	
21:00	Summit Briefing 打ち合わせ			
22:00	Personal Time 自由時間	Personal Time 自由時間	Personal Time 自由時間	
23:00	Lights Out 消灯	Lights Out 消灯	Lights Out 消灯	

Day0～Day2 の三日間は、英語力の無さを思い知らされたり、日本とは全く違う外国ならではの雰囲気圧倒されたりしたため、どっと疲れる日々が続いた。活動中に寝てしまうこともあり、風邪を引きそうにもなった。まだこの時は、他の国の参加者とそれほど打ち解け合っていなかったため、英語を使うことが苦痛に感じることもあり、Cultural Night Preparation 等で日本人と話すときは、本当に天国にいるような心地さえた(笑)。でも逆にいえば、この時日本チームの結束力は一気に高まった。ここから私たち日本人の快進撃が始まる。

Day 3 – Day 5

	2012/7/18 Day3	2012/7/19 Day4	2012/7/20 Day5
7:00	7:00 Breakfast 朝食	7:00 Breakfast 朝食	7:00 Breakfast 朝食
8:00	*External Visit*	Arts Masterclasses 芸術セミナー	*External Visit* Singapore Police Force シンガポール警察
9:00	Economic Development Board 経済開発庁		
10:00			
11:00	Lunch 昼食		
12:00	Wash up and Change 着替え	Lunch 昼食	
13:00	*External Visit*	*External Visit* Housing Development Board 住宅局	*External Visit* MediaCorp メディアコープ (メディア企業)
14:00	Tea with H.E. President Tony Tan Keng Yam 大統領訪問	Student Dialogue2 スチューデント ダイアログ2	
15:00			
16:00			
17:00	Journaling 日記		Journaling 日記
18:00	Student Dialogue1 スチューデント ダイアログ1	Dinner 夕食	Dinner 夕食
19:00		Singapore Youth Festival International Night シンガポール ユースフェスティバル	Personal Time 自由時間
20:00			
21:00		Supper 夕食	
22:00	Personal Time 自由時間	Personal Time 自由時間	
23:00	Lights Out 消灯	Lights Out 消灯	Lights Out 消灯

Day3～Day5 の三日間は、チャレンジの日々だった。日本チームの支えによって、英語ができないからといつまでもくよくよしているのはもうやめようと思えた。私たちは積極的に外国人に話しかけるようになった。すると外国人の方もそれに応えてくれ、私たちがどんなに英語で表現するのに時間がかかっても、またどんなに分かりにくい英語を話しても、ちゃんと耳を傾けてくれたのだ。本当にうれしかった。そしてそのうち、英語を使うことが楽しいと思えるようになった。その結果外国人とも仲良くなり、とても充実した日々を過ごすことができたと思う。

Day 6 – Day 9

	2012/7/21 Day6	2012/7/22 Day7	2012/7/23 Day8	2012/7/24 Day9
7:00	7:00 Breakfast 朝食	6:00 Breakfast 朝食	7:00 Breakfast 朝食	8:00 Breakfast 朝食
8:00	Learning Trail @MacRitchie 自然体験 Mac Ritchieにて	Adventure Camp アクティビティー	Student Dialogue3 スチューデント ダイアログ3	
9:00				
10:00				
11:00				
12:00	Lunch 昼食		Cultural Night Preparation 文化発表会準備	Free&Easy 自由行動
13:00	Community Service 幼稚園訪問		Lunch 昼食	
14:00			Debrief and Cultural Night Full Rehearsal 報告とリハーサル	
15:00				
16:00			Wash up and Change 着替え	
17:00				
18:00		Journaling 日記	Closing Ceremony and Farewell Dinner 閉会式&晩餐	
19:00	Dinner 夕食			
20:00	Cultural Night Preparation 文化発表会準備			
21:00		Personal Time 自由時間		
22:00	Personal Time 自由時間			
23:00	Lights Out 消灯	Lights Out 消灯	Lights Out 消灯	

Day6～Day9 の四日間には、私たちの努力が実り、成果が形になって表れた。このころには、英語をずっと使ってきたからか、Student Dialogue のときでも、相手が何を話しているのかが段々と分かるようになってきた。普段の会話においても、相手がゆっくり話してくれているとはいえ、話の内容がわかり、ジョークを言い合えるまでになれたことは、大きく成長した証だろう。また日本人と話すときでも、自分達がした外国人との会話について話すことが多くなり、日本チームのかつての、つらさを共有する結束とは違う、外国人と話すことの喜びを共有する結束が強まった。だから、最後の別れの時は本当に悲しかった。最初のころは、このサミットの期間が長く感じられたが、いざ別れの時となると、あっという間に過ぎ去ってしまったように感じた。本当に APYLS は最高だった。

文責 金城美咲

Before The Summit

—出発までの日本チームの動きについて岡本が紹介します—

Skype 会議

最初はお互い名前しか知らないわけで、「どんな人なんだろう…」
「辺境にいる私たちは都市民と仲良くなれるか（山口組）」と不安
に思っていました。ところがどっこい、とてもいい人たちばかりで
（しかもハイスpekである）二回目くらいからは、砕けて話せる
ようになりました。

話した内容は、役分け（Cultural Exhibition、プレゼン、Cultural
Performance）、ソーラン節の隊形、Cultural Exhibition の出し
物、そして、プレゼンの内容決め、などについて。

一番の障害となったのは、東京組と山口組の「つながりにくさ」だ
ったと思います。Skype の音声聞き取れなくて、チャットだけで
行ったこともありました。

「真面目に、しかし面白さも忘れない。」そんな Skype 会議でし
た。この Skype 会議の目的はもちろん決めなければいけないことを
決めることもあるけれど、それだけでなく深い付き合いをしていく
仲間の絆を深めていくことにもあると思いました。

荷物の準備

11 日間のサミットを支えるものをきちんと準備しなければなりませ
ん。確実に持って行かなければいけないものは APYLS のサイトを
みればわかります。前回のサミットに参加された先輩の助言から持
って行った方がいいものや、展示物、演示の小道具、などで格段に
荷物が増え、「日本人は荷物が多い」と言われるくらい平均して荷物
が多くなりがちです。（特に女子なら、浴衣の作り帯が、場所をとり
ます）確かではありませんが、ルームメイトからものを借りるとい
うのも、コミュニケーションの一つの手となるのでは！

また、ひとつ注意しなければいけないのが、Cultural Exhibition
の荷物の分担です。かなりの量の展示物を上手く分けることができ
ていないと、一人の負担がものすごく大きくなってしまいます。



“ソーラン節の隊形についての提
案。出発一週間前の様子。”



“Cultural Exhibition の荷物！！”

心の準備



“楽しく行こうぜ！！”

おそらく、どんな人でもシンガポールに行くことが決まった時、出発前日、飛行機で日本を出たとき、空港から学院までの道中、学院についてから、の心の状態は違ったのではないのでしょうか。楽しみが強くなることもあれば、不安が心を暗くしてしまう時もあったかもしれません。それでも、始まったら始まったで楽しまないともったいないと思うから、頑張っって苦しむ。少し苦しんだら、楽しいことがやってくる。そんな感じで、サミットは始まりました。

それでは、**Let's start our Summit!!**



“CHANGI 空港から学院へ！
みんなに会えるまであと数時間…”

Hello!!

文責 岡本千秋

What We Did

Day 0 (7/15)

Arrival

初日。それぞれの学校が Hwa-Chong に集まる。前から聞いてはいたけれど、エアコンが効いていてチャンギ空港からすでに寒かった。いきなりかよ、とは日本人の誰もが思ったはず。到着時間は学校ごとにまちまちで、麻布なんかは筑波・下関より一日早く着いていて、Cultural Exhibition に使う東京スカイツリーの模型を組み立ててくれていた。筑波が Hwa-Chong に到着した頃には、ほとんど全ての学校が Dining Hall に集まり、Dinner をとっていた。



“麻布”

APYLS 用のリュックや HANDBOOK をもらって、みんなと合流。下関の子とはここで初めて会った。会いたかったよ、リンくん、金城さん、岡本さん!!日本人同士、一瞬でうちとけられた。



“筑附”

Mass Interaction Session

筑波なんかは最初の食事にも関わらず、ろくに味わえないまま、記念すべき最初のプログラム、Mass Interaction Session がスタート。内容を簡単にすると、自己紹介を含めたゲーム形式のオリエンテーションという感じ。色々なことをやった。自分が参加したグループ (with 岡本さん) は、布越しに相手の名前を当てたり、トランプで建物を作ったり、鬼が来る前にグループの他の子の名前を指をさしながら言ったり、お釈迦様のゲームをやったりした。楽しかったのはもちろんだけど、個人的には、行く前から世界中の子と友達になりたいとは思っていたのに、いきなり周りが English オンリーになった時にはさすがに焦った。やっぱり、US や UK だったり、オーストラリアの子が話す英語は速かったね。中国や韓国の人の英語のレベルは日本寄りだと思ったら、全く逆だった。日本が一番言語面で遅れているんだな、ということを実感した。他のグループはどんなことしたんだろう? とにかく、このプログラムで、一気に仲良くなれたのは言うまでもない。



Summit Briefing

とてつもなく寒い部屋に連れて行かれ、APYLS 期間中の注意事項を聞いた。洗濯や、クリーニングの日程だとか、禁止事項を言われたが、確かその中には、異性の階には入るな、という文が赤で書かれていたような気がする。みんな苦笑していたけど、やっぱりこういうことはどこの国も同じらしいよ。

Personal Time

せっかく初日を担当させてもらったから、こういう時間のことも書いておこうと思う。自分は、Hwa-Chongの生徒の Andy と二人部屋だった。彼は慣れたもので、声を掛けようとしていた自分に一言挨拶すると、パソコンを持って、Study room という名の Play room で他の Hwa-Chong の子とゲームをしに部屋を出てしまった。結果的に仲良くなったけど、最初は不安だったのを覚えている。こういう自由時間は、他の部屋に突入して、色々なことを話した。案外こういう時間が、APYLS で純粹に一番楽しかったのかもしれない。

(多田)

Day 1 (7/16)

Breakfast

6時に朝食という鬼畜なスケジュールにびっくり。こんなに早いのはこの日だけだったけれどね。全ての食事はビュッフェ式で、好きなものを好きなだけ食べられる。ごくたまに外れもあったけど、基本的に美味しい。各国の伝統料理も意識しているみたいで楽しかった。白米とお味噌汁が出た日も。座る場所は自由だから、積極的に他国の人の隣に座って話すべし！日本で固まっていたらもったいない。朝だったら、”Did you sleep well?”とか何とか言って話しかけるといいと思う。

Opening Ceremony

さて、サミットの幕開けとなったのがこれ。教員含め参加者全員が校庭に一列に並び、紹介を頂く。ご来賓として国防大臣と文部大臣を兼任されている Mr. Lawrence Wong という方が来てくださった。このような国の中心に立っている偉い方が学校に来てくださることに驚いた。日本ではあまり見られないよね。



“日本人整列—^^”

続いては学校案内。とにかく広すぎて感動した。敷地内に学校の歴史を辿る博物館があったり、美術部の人々が作成したと思われる

芸術作品が美術館さながらに展示してあったり。車で移動できるようになっている歯医者さんまであった。ホワチョンの子に、うちの学校にはこんなのこないと言ったらとても驚かれた。いやいやこっちが驚きだよ。学校だと思って見学しないほうが良い。本当に悲しくなる笑

Cultural Exhibition

プレゼンと並行して日本で準備を進めてきた。日本はどこよりも豪華で、良い展示だったと思う。一番人気だったのは、千秋ちゃんがうちわの裏に筆ペンで名前を漢字で書いてあげるという企画。あれは素敵なアイデアだった。折り紙も人気で、直くんが持ってきてくれた作品は展示終了時にあげたらとっても喜ばれた。あとは、日本の漫画も好評を博していた。意外に知られていて、私達日本人よりも詳しい子がたくさんいた。本当は中心にするはずだったスカイツリーは、何だか影が薄いまま終わってしまった。



反省するとしたら、場所が足りずに展示できなかったものが多くあったり、お菓子が大量に余ったりしたこと。量はもっと少なめで良かったね。でも最終日にみんなに配って回れたからいいか。

City / Heritage Tour

さて、昼食を食べたら街に繰り出して観光。(因みに、お金を両替するのならこの辺りが一番レートがいいみたい。バスの運転手さんが連れて行ってくれると言ってくれたが、来年以降も連れて行ってくれるかはわからない。) 船に乗り、シンガポールをぐるりと見て回った旅が一番印象的だった。おもしろ写真を撮るんだ、と楽しみにしていたマーライオンはなんと修理中。ちょっとがっかりしてしまった。この頃には大分みんなと仲良く話せるようになった。



“休暇を楽しんでおられる様子。”

Journal Briefing

これは2日に一度のペースであるプログラムで、サミットで経験したことを日記に書く。これらは、後日全てブログにアップロードされていた。記念すべき第一回目の **Journaling** が終わると夕食。

Cultural Night Preparation

最終日の夜に行われる **Cultural Performance** に向けての準備をした。日本チームはソーラン節を踊ると決めていたため、初めての合わせ練習を行った。でもね、この時間、2時間もあるんだよ。だんだんみんな飽きてきて、ファシルの提案によってゲーム開始。ゲームという聞こえはいいけど実際はもはや暴露大会でした、はい。笑

ルーレットで当たった人にはどんな質問をしてもよくて、質問された人は必ず答えなければならない、という感じ。個人的にはすごく楽しかったよ！笑 日本人同士の仲もこれで更に深まったはず。

Personal Time

プログラム終了から消灯までに一時間の自由時間がある。プレゼンが近かった日本は、集まって準備をした。

(山下)

Day 2 (7/17)

External Visit (Government of Singapore Investment Corporation)

施設訪問の意味では最初の GIC。名前でわかると思うけれど、GIC はシンガポール政府専門の外国経済面での仕事を担当している会社だ。海外に 9 つのオフィスがあって、ニューヨークやロンドンに混じって、東京にも設置されているらしい。具体的にいうと、海外を対象にした株や、金融市場の開拓、不動産投資などの経済政策を担当している。女性が話し



ていたことを端的にまとめると、GIC の達成すべき目標は次のようだとと言えるだろう。GIC による細かく厳しい管理の下、様々なリスクやメリットを考慮した上で、国際的な投資を積極的に行うことにより、長期的に見て大きな利益・リターンを獲得すること。ぶっちゃけた話、政府の話をしているようなもので、目盛が最近の西暦から始まる、右肩上がりのグラフを見せられた。自分たちの成長具合を強調するのはしょうがない、というか当然だとは思うけれど、実際その伸び率には著しいものがあつた。

初めての講話なので、少しみんなの様子も書いておこうと思う。基本的に、話を聞いている間は静か。メモをとりつつ聞いていたが、驚くのはここから。質問の時の、挙がる手の数が多い。色々な種類の質問があつて、重要な所というより、例えば中国の子は中国のことをモロ訊いていたし、ただ単純に気になった事を聞いている印象があつた。行く前からわかっていたことだけど、他の人が話している間に手が挙がることも普通の事の様だつた。

External Visit (A*Star)

シンガポールの政府系機関を回って、二つ目。すごくシングリッシュの訛りが強い人が、すごくわかりやすい説明をしてくれた。A*Star は、シンガポールの科学技術のレベルを上げる為の機関で、実績の伸びを強調していた。シンガポールが狭くても科学技術で国際的な水準を維持できる理由に、英語を言語としていることや、アジアで地理的に有利な場所にあることなどを挙げていた。海外からの若い研究者たちも積極的に招き、科学技術面で、より世界をリードしようとしている。実際に海外から来た人の話も聞くことが出来たけれど、確か一人は、結婚が理由だったような気が(笑)。ただ、見たグラフでは、実際先進国にもものすごい勢いで追いつこうとしているシンガポールのラインがあつて、日本人として多少の危機感を感じた。この後にその場で食事をしたのだが、その人たちが、APYLS の参加者の質問に親身に答えてくれた。

あと、A*Star の話を聞いたホールで "Lean On Me" を、歌詞を見ながら歌つた。ファシルの子がマイクで歌つてくれた。この時が初、かな？ファシルの子が歌うのに合わせてみんなで何回も歌つたんだけど、この時はまだ、帰る時に泣きたくなるぐらいの曲だとは思つても



みなかった。まだ歌詞も覚えてなくて、HANDBOOK やスクリーンを見ながらだったけれど、全員でウェーブをしたのもこの時。横幅が少なくて、すぐ波が返ってきた(笑)。全員で一つになった感覚があって、今思えば、随分グローバルな大波だった。

このあと、自分のグループは Fusion World を見学した。近未来的な技術の紹介を受け、最新技術の体験ができるショールームのような所で体感した (というより、遊んだ)。馬の動きを再現できる椅子だったり、レン



ピが表示できたりメモを書けたりできる机があったり、メンバー全員で楽しく過ごした。科学技術を見ても、大体が日本でもあるようなもので、正直な所あまり驚くことは無かったが、これから先、未来のことにに関しては、日本がそのレベルをキープ出来るかどうかわからない。そもそもこんな訪問があることから、シンガポールの意欲的な姿勢がありありと見えて、すこし焦りを感じたのも事実。他のことをしたグループもあったようだ。

Summit Dialogue 1 (Mr. Courl Baptista)

Mr. Courl Baptista の講話を聞いた。どんな人かというところから、「蚊」の駆除で大成功した人。彼はもともと研究者で、そこから蚊の駆除のビジネスを自分で考案し、シンガポールのシェアのほとんどが彼の会社らしい。シンガポールは、国の法律で虫の駆除を行っていて、APYLS 期間中も、そういえばほとんど虫を見なかったし、新聞にデカデカと蚊の撲滅を謳った広告も見つけた。正直、日本ではあまり考えられない内容だし、実際日本は市場として成立しないらしい。シンガポールは、起業も含めて、新しい仕事に取り組みやすい場所だと言っていた。彼は、三時間近い話の中で、どのような意思を持つか、何が成功につながるか、など、具体的な仕事内容のほかにも、若者に向けての事も話してくれた。ジョークも織り交ぜた、有意義且つ面白い時間だった。



Mr. Baptista がスピーチの中で繰り返し言っていたことは、Innovation - 革新 - だった。彼の会社の実績の説明に割かれた時間も結構あったが、これについては省く。Innovation は、何から起こるのか？それは、frustration (不満)、inefficiency (効率の悪さ)、NEED、passion (情熱) だと言う。革新をする中で、entrepreneurship (起業家精神) = 経営 + 決断や、教育が大切だと言っていた。教育は、革新について、具体的には観察眼を持つこと、相互に働きかけること、情熱を持つこと、と、起業家精神について、金融に関する洞察力を磨くこと、時には感情的に励ますこと、公正な評価をすること、などが重要とされた。



あのメンバーの中には、将来会社を切り盛りする人もたくさんいただろう。彼の話は、自分でも理解できるぐらい明瞭でわかりやすく、みんなかなり興味があった様子で、質問の数も半端じゃなかった。

気になった質問が、生態系に関係しないのか、というもの。一種類の蚊しか殺さないから生態系には全く関係ないよ、ということだったが、まだ影響が出ていないだけかもしれないし、シンガポールで新しいことに挑戦しやすい、というのはこういう意味も含むのかもしれない、とも感じた。

Journaling

思ったより、重かった。**Journaling** は、日記をつける時間のこと。PC室に移動して、好きな席に座り、日記を書く。ぶっちゃけると、長い人と短い人で差があった。日本は基本、短め(笑)。隣の外国の子の画面を、どれくらい書いているのかなー、なんて覗き込んだら、そこには絶望が待っていました(笑)。でも、**Day2**に限らず、毎日が、非常に濃く有意義なものだったので、書けないわけではなかった、と言いつけておく。**Blog**で全員分更新されるはずが、初めの方はリンクんの日記が何故か無かった。以外にたくさんの時間を割かれていて、終われば暇だったので、**Facebook**でたくさんのメンバー（向かいにいるんだから、直接話せばいいはずの子もいたが。）とチャットをした。

(和田)

Day 3 (7/18)

External Visit (Economic Development Board)

この日は経済開発庁へ行った。ここは経済戦略の立案、実施を担う政府機関であり、ビジネスのグローバル・ハブとしてのシンガポールの地位強化に尽力しているらしい。グローバル化が進む中、他国とのアクセスが容易なシンガポールが地理的にどれほど有利か等を熱く語られた。一番印象に残っているのは、質問の時間が一時間以上続いたこと。本当に、APYLS では質問が次から次へと尽きることがなく圧倒された。日本(少なくとも私の周り)では、質問タイムが取られてもほとんど出ないのが普通だったため、その違いに驚き戸惑った。しかし、External Visit も二日目となったこの日は日本人も少しずつ発言できるようになってきてよかった。

External Visit (Tea with H.E. President Tony Tan Keng Yam)

帰寮して昼食を終えると、大統領に会いに行く準備！彼に会うことは、このサミットの目玉の一つでもある。だって大統領だよ？自分の国でだって、おいそれと会えないよ？これってすごいくない？と、みんなのテンションはどんどんハイに。行きのバスではお土産に何を持ってきたかで盛り上がった。大統領官邸では、各国3分くらい彼とお話させていただく時間が与えられる。日本とシンガポールの気候の違いについてや教育のことについて話し、最後には記念撮影をした。物腰柔らか



かで、優しい話し方をする方だった。事前に彼がどんなことをされてきたのかを調べておけば良かったかも。仲良くなったインドの Vandi(超絶可愛い秀才。某麻布生が惚れかけましたね！にこにこ。余談だけどインドは毎年美人さんが多いみたいだからお楽しみに)は事前にそういうことを調べてきていたみたいで、感動もひとしおだって言っていた。



他国がお話している時間は、好きにご飯を食べられる。ここのお料理は本当に美味しかった。尚、筑附の山下が附属中のセーラー服を着ていない理由は永遠の秘密。(あ、因みにあんまり関係ないんだけど、寮の各階のロビーみたいなのところに置いてある緑色の大きな容器みたいなやつはゴミ箱だからね。洗濯物入れじゃないからね。初めて洗濯を出しに行く時は、必ずルームメイトに頼んで付けてきてもらった方がいいよ。いや何か別に関係ないんだけどね?)

Student Dialogue 1

待ちに待ったこのプログラム！日本のプレゼンはこの第一回目のトリだった。これのために、日本にいるうちから長いあいだ準備を重ねてきたのだ。本番は映像が流れないというトラブルさえ和田くんの上手いフォローで笑いに変え、楽しくプレゼンをすることができた。プレゼン後、色んな人に頑張ったね、すごく良かったよ、と言ってもらえてとても嬉しかった。時間をかけた甲斐があったなあと少し感慨に浸 “いつもはふざけている皆が真面目になる瞬間！”



ってみたり。その後のディスカッションはその日に発表されたプレゼンのテーマ別に4グループに分かれる。私は運良く日本のテーマのグループに割り当てられたため、時間の問題でプレゼンでは削ってしまったことも発表できて良かった。ディスカッションは、例え拙い英語でしか話せなくても、自信を持って一生懸命話すことが大事。あちらも一生懸命聞いてくれるからきっと伝わるよ。だめだついていけない…と思って萎えるとどんどん置いていかれるから、一瞬でも気を抜かないで。思ったことをすべて表現できないもどかしさは、もう悩んだ所でどうにもならないから早めに割り切るのが得策かも笑

Supper (Birthday Surprise)



“感動！感謝！一生忘れません。”

そして、この日の最後には、なんと！なんと！なんと！！私を含め誕生日が近かった5人は、全員からお祝いして頂きました…っ！涙
あの時の驚きと感動を、今でも昨日のここのように思い出せる。きっと一生忘れることはないだろう。本当に本当に嬉しかった。誰かに誕生日を覚えていてもらえるだけでも相当嬉しいのに、世界中の人に祝って頂けたなんて。今までに頂いた誕生日プレゼントの中で一番嬉しかった。ありがとうございました！！

三日目は、一番楽しくて幸せな日だった！はっぴー♪

(山下)

Day 4 (7/19)

Arts Masterclasses

事前を選んでいった5つの芸術コース（Chinese Finger Painting/Malay Dance/Hip Pop/Bangladesh Dance/Manga Painting）のうちの一つを受講。Chinese Finger Paintingでは、手の色々な部分を筆のように使って、絵を描くことを行った。それぞれの作品には国ごとの国民性がどことなく感じられた。余談ではあるが、アメリカ人の少年が、濃い原色の色合いで非常にカラフルな絵を描いており、そのエキセントリックな出来栄に、最後は描いた本人までもが苦笑いしていたのは面白かった。



External Visit (Housing Development Board)

シンガポールは国土が大変狭く、国民が居住する場所をどのように確保していくか、ということは大きな課題である。この国では国民の8割以上が国の運営する公団住宅に住んでおり、その管理を行う期間がHDBである。公団住宅自体は初期から存在し、古くなったものは改築して価値を高めたり、近年はより高層のものが建てられていたり、シンガポールではあちらこちらで工事が行われている。

見学では、周りが360度スクリーンの部屋で、やや感動的な演出による、HDBによる公団住宅の宣伝映像を観たり、ショールームにて公団住宅の内部を見たりした。公団住宅にはいくつかのグレードがあるが、平均的には、日本のマンションと似たような印象を受けた。それぞれの住宅には、住民の運動不足解消用の運動用具が備え付けられていたり、住宅ごとの民族の分布が偏らないような住民の振り分けがされていたりと、シンガポールの都市計画の綿密さには色々と驚かされる。小さい国である



が故に、普通では出来ないようなレベルでの、緻密な開発計画が実行可能である

というのは、他の欠点を補うだけの大きな利点であると思った。



高層住宅の模型

Student dialogue 2

Student Dialogue も二回目となり、大分慣れてきたように思える。テーマは、発展途上国における複数の問題と、それに対して自分達は何ができるのだろうか、というものだった。中国、イギリス、シンガポール、オマーンが人口、健康、移民、負債に関する問題についてのプレゼンテーションを行った。

今回のテーマでは、先進国と途上国での立場の違いがはっきりと浮き彫りになっていた為、プレゼンテーション後の話し合いでは、前回よりも国による主張の違いが目立った。しかし、単に「先進国はこうするべきだ。」というような一方的な主張ではなく、お互いが、相手の立場を理解した上で、どう協力すれば良いのかという大変有意義な議論となった。



Singapore Youth Festival International Night

様々な国の子供たち（といっても年齢の幅は広い）による、本格的な合奏、ダンスなどを劇場のような場所で観た。日本人の団体が一番最初だった。民族舞踊は、どれも新鮮で、面白い。しかし、コンテンポラリー・ダンスはなかなかエキセントリックで、理解するのはやや難しかった。



(和田)

Day 5 (7/20)

External Visit (Singapore Police Force)

ここでは警察の方に犯人逮捕の演習をやってみせてもらったり、危険物（爆発物や毒物など）の説明をしてもらったりした。そこにはあのサリンが展示されていたのだが、結構丸出しのまま展示されていたのだ。日本人としては少し敏感にならざるを得なかった・・・外では男たちが朝から訓練に励んでいた。皆さんマッチョだったので、彼らがゲ○でないことを祈りましょう。



External Visit (Media Corp)

ここではテレビやラジオの収録を体験したり、ニュースの生放送を見学したりした。テレビ番組では司会、モデル、アーティスト、カメラマンなどの役割があり一人一役を引き受けた。収録したものは全国放送されないということだったが、サウジの友達が別で受けていたインタビューをその夜ニュースで見たときには笑った。



Personal Time

この日は7時くらいから時間が空いていたので日本人みんなでシンガポールの繁華街のような所へ出かけた。ここで結構お土産とかを買った気がする。〇〇個で10ドルとか安いのか高いのかよくわからない売り方のものばかりで、いつもセットで何かを買うため荷物がすぐ増えた。個人的に思い出深い、ハートのサンダラスもここで入手！



(河野)

Day 6 (7/21)

Learning Trail @ Mac Ritchie



っばい出沒！僕たちは、猿が橋の手すりを走っているところを、転落しないかとひやひやしながら見ていた。僕たちは、薬品で貯水池の水の性質を調べた。もちろん中性でした。そのあとはひたすらウォーキング / 雑談。楽しかったー

今日の午前中は結構暑い中、シンガポールの貯水池があるところに行った。もう貯水池っていうよりは自然公園って言った方がいいかな。とにかくすごく広かった。ここでは、ランニングや、池でカヌーをしている人が大勢いた。ついでに言うと、お猿さんもあちらこちらでい



Community Service

午後からは、奉仕作業っていうことで保育園のようなところに行って、園児たちのお世話をした。ただでさえ小さい子供の世話は大変なのに、英語で言ってることがわからないから余計にきつかった。子供たちに

は折り紙を教えることになり、ここは日本人の腕の見せ所だと思って、めっちゃ張り切った。鶴やハートなんかを作ってたたら、子供たちだけじゃなくて APYLS のほかの国のみんなも聞きに来たりして、結構忙しかったなー。



Cultural Night Preparation

三回目の Cultural Night Preparation。この時間がすごく楽しみなようになってきていたあの頃。やっぱり、英語ばかりだと日本語が恋しくなるよね。もうこのころには、だいたいみんなソーラン節の振り付けは覚えてきたし（うまいか下手かは別だけどね）、プレゼンもとくに終わってたので、結構雑談ばかりしてた。みんなで特技見せ合ったり、秘密を告白したり、歌ったり、変顔したり・・・みんなのまた違った一面が見

れたりして面白かった。



“日本チーム結束の証！！”

Day 7 (7/22)

Adventure Camp

この日は日曜日。でも朝6時に朝食。いったい何をするのかというと、Adventure Camp。写真を見て頂くと早いんですが、要するにこんなことを午前中いっぱいやってました。深緑のポロシャツがユニフォームのどなたも明るいインストラクターの皆さんに足はこうだ手はこうだと教えてもらいながらターザンロープに綱渡り、壁登りなど体を動かしました。なかなかやらない動作ばかりで新鮮



でした。高いところが多かったので、高所恐怖症の人は悲劇だったでしょう。

“こんな感じ。装備もしっかり。”

昼食はもうおなじみケータリングサービスでしたが、7日間待つについに、ついにトロピカルフルーツが並びました。ランプータン、ライチに果物の王様ドリアン、果物の女王マンゴースチンと、日本ではあまりお目にかかれないものばかりです。期間中の主食はリンゴとスイカとメロンだった僕にとって(嘘のような本当の話)、そしてマンゴースチンのためにシンガポールにいった僕にとっては(これは三分の一くらい嘘)この上ない昼食でした。でもドリアンだけはたくさん食べられる代物ではありませんでした。みなさんも機会があればためらわずに一口どうぞ。

午後は川(ということになっている貯水池)で20人乗りのボートに四隻に分かれて乗り込みました。水の掛け合いがあったことは言うまでもありません。でもどこまでいってもそういうのが一番楽しいですね。濡れてもよい靴で来るようにということで僕は運動靴で行ったのですが、普通に意味なかったです。サンダル以外は無効なので次ぎいく人は気をつけてください。もちろん動力は人なのでみんなでオールを持ってこぐんですが、なかなかタイミングがあわなかったです。そしてすこし疲れしました。



“その川とボート。天候は最高。”

Personal Time (Night Safari)

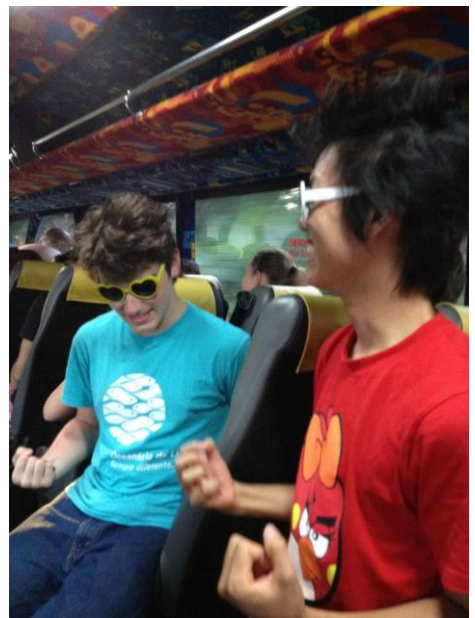
夕食は7時で、そのあとの自由時間はオーストラリア、イングランドチームとともにナイトサファリ!ということで夜のシンガポール動物園に行きました。こういうときに冷めちゃう性格なんでどうしようもないんですが、率直にいうと、暗い中動物がいるだけでした。本当に。それ以上でもそれ以下でもありません。あと暗すぎて写真はまずとれません。あ、なんかごめんさい。でもなかなかない経験だったことは確かです。それ

に楽しかったですよ。ただ冷めちゃうだけなんで。あ、それにムササビが飛んでました。あれはちょっと嬉しかったです。Jacob もびっくりでした。

酒井)



“これがホワイトタイガーです。暗い中唯一
うまく撮れた写真。”



“ワックスでスーパーサイヤ人。こ
うなのが国境を破る手段ですね。”

Day 8 (7/23)

さてさて、一応翌日が最終日とはいえ、最終日は一日中自由行動で半分以上のメンバーは帰国するという、いわば帰るための一日なので、この日が実質の最終日なわけです。3ヶ月かけて一生懸命準備きた APYLS もついに終わりです。つらくも楽しかった APYLS もとうとう終わりを迎えようとしています。みんなどんな心持ちだったんでしょうか。当時は何とも思わないものですよ、こういうのって。ちなみに僕は、この睡眠不足も最後だと自分に言い聞かせ、なんとか乗り切ろうとフラフラなりに意気込んでいました。最後の力を振り絞るってやつですね。確か5時にはもう起きていて、寮の周りを暗い中走っていたと思います。あれはあれで楽しかった。(いろいろあったんです。いやべつにかわいい子が気になってとか自己嫌悪とかではないですからね。赤道の下なら無条件に暖かいというわけではないんです。)

Student Dialogue 3

7時から朝食で8時から最後のメインイベント Student Dialogue 3 が行われました。この日のプレゼンはく The United States "Human Rights" / Australia "Democracy" / South Korea "Women's Rights" / India "Racism"。僕は高齢化社会のグループに割り振られました。この日はどれも結論を出すには難しい議題でしたが、高齢化社会というのなかなかでした。もちろん「高齢化社会といえば日本だけどうなの？」みたいなふりがったわけですが、ねえ、年金制度崩壊とかいってるなか何をどういえばいいのか困りますよね。しょうがないからもうありのままをいいました、もうだめかもしれませんって。あの時は悔しかったですね。



“炎天下での練習”

Cultural Night Preparation

という感じですべてのメインイベントが終わってしまいました。時間は11時。でも感傷に浸っている暇はありません。Closing Ceremony なるものが待ち構えているんです。ここから1時までにはそこでやる出し物のソーラン節の練習でした。お昼を食べてからはリハーサルがあり、そこで実際に本番を模して踊りました。個人的には、まあなんとかなるかな、というレベルだったので、心苦しかったです。ソーラン節の頭に入らなさは結構ひどくて、迷惑かけて、本当にソーラン節

担当誠之郎をはじめみんなには申し訳ありません…。そんなこんなで日本チームのリハーサルは3時くらいに終了したのですが、炎天下でそのあと1時間くらい練習に費やしたと思います。通りすがりのひとに見られ、声をかけられました。



Wash up and Change

さて、練習も終わり、出発時間まであまり時間がないなかトラブル発生。シャワーを浴びて、予定通り和服に着替えていると、ルームメイトの Andrew に「正装で行かなきゃだめだぜ、一応 Closing Ceremony はフォーマルだからさ。」といわれて啞然。ハンドブックには traditional ethnic costumes/formal uniform とあって、どっちでもよさそうな気もする。そのことを Andrew に言うとそれでも formal でなきゃだめだよと、Andrew がすっごく真面目な表情でいうので、とりあえずフォーマルなほうに着替えてみんなに相談しにいきました（このとき既に時間が迫っていて、みんなもうバスに向かい始めていました）。結局時間の都合上女子は浴衣、男子は正装で行くというちょっとちぐはぐな感じになりましたが、とくになにも問題ありませんでした。

急いだ割に会場についたのが少々はやすぎて時間をもてあましたので、近くのショッピングセンターで自由行動ということになりました。凜君がバットマンの写真をバチバチ撮っていたのをよく覚えていますが、それ以上なのが Jacob。僕はそのときココナッツアイスを食べていたのですが Jacob にフレーバーは何かと尋ねられ、そうこたえと、「えー、ココナッツ好きなの、まじで!？」みたいな感じで驚かれて、で、僕はそれに驚きました。なんでそんなに驚いているのか尋ねても、「いやだってココナッツだよ!？」みたいな感じで驚かれました。んー、洗剤の原料だと思い込んでるんでしょうかね（ばかにしてないですよ）、そのくらい不思議がってました。

Closing Ceremony and Farewell Dinner

そんな訳の分からない違和感を抱えつつ会場に入ったのですが、すっごく綺麗で、高校生の集まりが使うとは思えないくらい設備でした（後日シンガポール指折りのホテルだと判明）。写真を撮る最後のチャンスとばかり、みんなで撮り合いました。最後だなーってこのときくらいから思い始めました。そのあとダイニングホールに入り、国別に割り当てられた席に着席します（下関と筑附はおなじテーブルで麻布は中国チームのテーブルでした。麻布は左遷されたんでしょうか？それとももっと深い意味が？はい、もちろんないはずです、きっと）。校長とか大臣とかのお話のあと（手短でよかったと思います）、facil が頑張って写真を撮って編集したムービーが流されました。内容も偏りなく日程を回想する形で、



“ソーラン節の直前。”

ハイクオリティ。さすが facil という感じでした。その後期間中に書いた日記でいいことを言っているものが流されつつ、しばらくの食事タイムとなりました。

そしてついに、本当に本当に最後のイベントソーラン節を踊る時が来ました。ささっと着替えて（日本の出し物は後半のはじめのほうだったと思います）、さあ頑張ろうかみたいな感じになって、踊って、最後は岡本さんの美しくかつ迫力のある「大和魂」の文字を掲げて無難に（正直僕はちょいちょいミスしました）終わりました。お世辞だかなんがかわかりませんがとりあえず、いろんな人が the best performance だったとほめてくれて、嬉しかったです。誠之郎と凜、ありがとう！各国の出し物も続々とつづく中、僕のお気に入りには UK チームのイギリスの服の流行を年代ごとに追ったものです。順番に時代ごとの格好をした人が出てくるんですが、



BGM も全部 UK のアーティストのものを使うなど、それはもうオシャレで、伝統の国、という感じに溢れていました。フィナーレはみんなでステージの前に集まって音楽をかけて騒ぐという流れになったのですが、ここだけはエンジョイしてた凜君とか山下さんとかにできるなら譲りたいところです。というのも僕こういうの苦手なんで、同じく苦手なルームメイトの Mitch と、こういうのはなんかねー、むりだよねーって言いながら外で傍観してました（実は Alethea に「踊れよー！」ってめちゃくちゃ言われて、

対応に必死でした）。ここ本当はめちゃくちゃ楽しい場面です。書けなくてごめんなさい。

さて、ついにすべてが終わり、明日に備える必要もない dedicates は boarding school に帰っても興奮さめやまず、寝るということを忘れてしまいました。こうなって大変なのは facil。何度も静かにして各自の部屋に帰って寝るよう説得していました（僕は冒頭の通り眠くなくてもおかしくないはずなのに、一周回って覚醒していたので、静かに起きてました。新境地でした）。申し訳なかったですけど、最後なんでみんな楽しむことを選びました（もちろんちゃんと寝た人もいます）。みんな基本的に他愛ない話をして、僕はたまに誠之郎のパッキングの邪魔とかして遊んでました。facil も大目に見てくれましたが、さすがに徹夜は許してもらえず、3 時くらいには寝ました。facil のみなさん、ごめんなさい（厳密にはここは day9 です）ね。

（酒井）



“眠らぬ民。騒ぎたいけど騒げない。いい時間。”

Day 9 (7/24)

前日の closing ceremony とプログラムが終わったという安心感、そして最後のルームメイトとの楽しい(笑)夜で、疲れがどっと出た朝から一日が始まった。

この日は各国代表の帰国時間が異なり、また筑附と下関の帰国日でもあったので、日本代表9人で Sentosa Island 観光を楽しんだ。Sentosa Island は日本でも有名だし、写真もよく見ていたので、僕的には楽しみにしていた。予想通り観光客も多く、賑わっていて様々なアトラクションを楽しんだ。特に印象的なのは Luge というバイクのような乗り物。みんなで童心に帰って、ガチバトルをした(笑)あと海にも入ったなー。村上先生ありがとう！

Facebook の写真とか見てもわかるけど、みんなはっちゃけてたなー

そうそう、途中で男子と女子に分かれて、『誰かさん』のせいで男子は迷ったよね。結局目的地にあったアトラクションは高すぎて諦めたし。すいませんでした。

帰りは帰りで、またひとつ事件が起きた。集合場所に和田君が現れない！飛行機の搭乗時間というタイムリミットの中、懸命な捜索活動が行われた。みんなで手分けをしてショッピングセンターを探し回り、山下さんの公衆電話を使うというナイスアイデアのおかげで、和田君がちゃんと一人で帰っていることが判明した。本当に焦っていたから安心したねー。今後もこういうことがあると大変だから伝えておくけど、日本の電話よりも音質が悪いから気をつけてね！

無事 Hwa Chong にみんな帰れて、筑附・下関の両校は帰国した。見送りに行った時も、カヤジャムの入れ替えとかあったね(笑)



(隈井)

Day10, 11 (7/25, 26)

ここからは番外編として、麻布チームのシンガポール観光の様子をまとめます。去年も麻布チームが多めに滞在していたので、今回も大丈夫かな？と思って頼んでみたところ、即 OK が降りたらしい。さすが自由な校風の麻布だよ(笑)出国前に多少計画を立てていて、現地でガイドブックを村上先生に買っていただいたので、有意義で楽しい観光ができたと思う。



1 日目は自転車をレンタルして海岸沿いを走りながら、Marina Bay Sands やラフな格好でも入れるところを巡った。やっぱり印象的なのは Marina Bay Sands。みんなとのクルーズの時に船上から建物は拝められたけど、中の施設も凄かった。中央に水が流れていてゴンドラに乗れたり、様々なブランド店が入っていたり。それよりも中にいる人がみんな richmen に見えた。めっちゃ金持ちを装って物色して、名札を

見て値段の高さに驚く遊びをした(笑)あとここでもひやっとすることが。屋上にみんなで行き、記念撮影や軽食を済ませ、記念にとプールを覗きに行くと、目の前に客室へ繋がるエレベータを発見。しかもちようどドアが開いたので、『乗るっきゃないっしょー』ということで実行。そして下階に向かう途中に、ルームキーがないとボタンが押せないことに気づく！焦る、途中で降りる、ちょっと見学、すぐに上階へ。こういうところのセキュリティは嘗めてはならないことを学んだ。この日の夕食は、現地の美味しいものが食べたいということで、タクシードライバーさんのおすすめのお店で、reasonable で tasty だった。そして夜はしっかり勉強した(笑)



2 日目は変わって真面目モードに。Raffles Hotel や観光スポットをタクシーや地下鉄を使って巡った。でもこの日は辛かった。昼食としてインド人街で食べたカレーが異常に辛かったにもかかわらず、完食してしまい、

すぐに体に異変が現れた。あれをフツーに食っていた子供はどうなっているのかと疑いたくなった。

Raffles Hotel は趣があり素晴らしく、いつか『大切な人』と再び訪れようと決心した。ホテル内でお茶もして優雅な一時を過ごせた。その後色々な場所を巡り、日本のみんなへのお土産などを買った。ちなみにこの日のベストショットは村上さんとラッフル像。

こうして2日間の観光を楽しみ、日本へと帰国する時



を迎えた。Hwa Chong にはトータルで 3 日間多めに滞在させていただいたので、感謝の気持ちとして村上さんのオセロを贈呈した。今後プログラムに参加する人たちは、日本代表として恥じないように、出国前 1 カ月間はオセロの特訓をすること！

空港にはたくさんの Facilitator が見送りに来てくれた。みんなとの別れを惜しみながら、出国ゲートに向かった。この時は結構辛かった。本当に良い思い出ができたと実感した。

(隈井)

Student Dialogue



セッションは3つに分けられ、4国ごとにプレゼンを行います。各セッション後に4つのグループに分かれ、プレゼンをうけたそれぞれの議題について少人数でディスカッションを行ないます。写真右はプレゼン前の日本チーム。私たちの Natural Disasters の発表の内容は次の”Presentation”で解説します。

Session 1 (Alleviating Our Common Crises)

フィリピン (Food and Agriculture)

バイオ燃料の使用など、世界的な食料危機の悪化させている原因とはなにか。食糧援助はこの問題をどこまで解決しうるか、またその他に各国がとれる策はあるか。

マレーシア (Climate Change)

気候変動の大きな原因や影響はなにか、各政府や国際会議はどのような対応ができるか。また地球温暖化を防ぐために個人はどのような行動をとるべきか。

サウジアラビア (Pollution)

国境を越えた汚染を防ぐために、政府また企業などの個人はどのような行動をとるべきか。

日本 (Natural Disasters)

近年の世界的な自然災害に、人間の活動はどのように影響したか。各政府は、災害が発生したときのためにどのような準備ができるか。

Session 2 (Supporting Our Fellow Citizens)

中国 (Population)

増えゆく人口に対し、衣食住、インフラ、などを適切に供給するにはどうすればよいのか。また、教育を十分に受けられない問題や、人口増加によって引き起こされる資源問題などについて。

イギリス (Health)

健康問題が発展途上国において特に顕著であるのはなぜなのか。また、アメリカ、イギリスにおけるヘルス・ケアサービスを参考にして、発展途上国での健康問題は、どのようにすれば解決できるのか。

シンガポール (Immigration)

移民が社会に与える影響は何か。違法な移住はなぜおこり、そしてどうすればそれを制限できるのか。また、移民に対する批判的な感情はどのようにすれば無くせるか。

オマーン (Third World Debt)

発展途上国が大量の借金を抱えているのはなぜか。それによってどんな問題が引き起こされているか。そして、どのようにすれば途上国の借金は減らせるか。

Session 3 (Realizing Our Universal Ideals)

アメリカ (Human Rights)

人権を侵害する組織や個人とはなにか、また彼らの動機はなにか。政府や国際的な機関は人権を保護するためにどのようなことができるか。

オーストラリア (Democracy)

民主主義の中核とはなにか、またそれは世界的なものか、西洋だけのものか。政治への無関心や選挙違反は民主主義にどのような影響を及ぼしているか。これらはどのように解消すべきか。

韓国 (Women's Rights)

女性の権利はどのように拡大されてきたか。現在でも女性が差別されているのはどのような場面か、またそれらを解決するにはどうすればよいか。

インド (Rasism)

人種差別問題において少数派は歴史上どのような扱いを受けてきたか、またその原因は何だったか。これを解決するために政府、さらに個人はどのようなことができるのか。

(野辺・和田)

Presentation

Script

Hello. Today, we are going to talk about natural disasters.

Firstly, we would like to say thank you from the bottom of our hearts once again to the people all over the world who prayed for us and donated supplies when the big earthquake hit Tohoku area, northern part of Japan last year. We will never forget your kindness and cooperation beyond national borders. Now, it is our turn to let you know what we have learned. A year and four months have passed since the earthquake occurred. Today, we will pick up the one aspect that is important that occurs any kind of disaster takes place, and is worth sharing with you all to minimize various damages. It is.... how to deal with information.

Please take a look at this film about natural disasters, which have happened in the world since the beginning of the 21st century. It is a reminder of what had happened. (和田)

～動画～

As you saw, we have faced various kinds of natural disasters. Natural disasters have following features:

1. They might occur at any place in the world
2. They are inevitable
3. They sometimes causes serious damage

Of course not all damages are serious. However, if it should be caused, and if you have not fully prepared for that, your country will fall into panic. Yes, whatever country we live, we must prepare for it.

When natural disaster occurs, there is usually a disorder. To act accurately in such a situation, we found out that information play key roles. After the earthquake, we also faced such a disorder. Today, we will show you the situation we fell into, and by giving consideration to that, we will suggest to you the way to control information in the end of this presentation. (隈井)

It was at 14:46 on Friday, March 11, 2011 that the main shock occurred. Along with damages by the tsunami, nuclear power plants and so on, it was named “Tohoku Earthquake”. The magnitude of the earthquake was 9.0 - the most powerful earthquake ever measured in Japan, and fourth largest in the world. More than 15,000 people were killed. More than 3,000 people are still missing. People lost their homes and their hometown. Many are still living in temporary residences.

After these terrible natural disasters occurred, some man-made disasters also occurred. Most of

them were caused by lack of accurate information. We will refer to the three man-made disasters that were particularly large and serious. (多田)

The first is damages caused by underestimation. The Japanese government had regarded the nuclear power plants as completely safe and had not prepared for the worst situation, based on science. So when they collapsed and started to leak radiation, specialists and the government were not certain what measures should be taken and they could not disclose vital information. They could not work correctly. So people and local governments fell into lack of information. This caused the delay in rescue operations and assistance for refugees. (河野)

The second is the government's inappropriate management. When the earthquake occurred, a large number of volunteers came from all over the country. Though the number of volunteers was enough to help the people in Tohoku area, the volunteer centers of each damaged town couldn't get enough information from the government; hence they could not distribute the volunteers efficiently. As a result, volunteers did not work as smoothly as expected. (酒井)

The third is damages by rumor. When The Fukushima nuclear power plants collapsed and a great amount of radiation spread from it, the government could not settle standards on how much radiation people can be exposed to. People could not know how much radiation is dangerous for their health, and could not be sure that their food, which was said to be safe, was really safe. Many people who were afraid of polluted food stopped buying any food made in the Tohoku area. A lot of safe food was thrown away and many farmers and fishermen suffered seriously. Information sender that gives us precise and trustworthy information was needed. (金城)

Looking these three cases, we can say as follows;

Underestimation) The government's underestimation, which is regarding nuclear power plants as completely safe caused the delay in everything.

Order) People needed more information to distribute volunteers efficiently.

Rumor) People needed quick and accurate information to protect themselves from radiation, and to decide which food were safe to eat. (岡本)

In conclusion, we think that lacking information in the emergency causes many serious damages. To reduce those damages, the government should give us quick and precise information and legal binding indication as soon as possible.

But when the government is the only source of information, some problems like following will

arise:

- We can't avoid a distortion of information from experts because they are controlled by the government and the mass media.
- Experts and the government have some trouble in grasping the situation because they aren't "there".

So we propose to use SNS to try to solve these problems.

(野辺)

This is a tool that can transmit information to everywhere immediately, and let individuals send out information. We will be able to act more quickly if we report the situation each other by SNS. But it is therefore also a tool that let wrong information spread out. The trouble is that there are too much information sources in SNS and that's the weak point of it. It's hard to judge the situation by information from ordinary people that don't have enough knowledge. To prevent the problem, we suggest a system to give a license something called "Reporter" to some people that have been approved to have enough knowledge, and each individual judge information whether it is appropriate or not from their stable and enough information.

We would be happy if our idea would be helpful to your country should natural disasters ever occur, and believe that, if the government all over the world do this, the level of preparedness will be dramatically increased across the globe.

(山下)

Explanation

議題は去年と同じ「自然災害」で、内容が被ることを避けるため斬新なアイデアが必要だった。途中で結論部に大幅な変更をした。プレゼンの製作過程の紹介、内容の解説をする。

前提

今の技術で自然災害を食い止めることは実質不可能なので、我々はそれらからの被害を最小限に抑える努力をするべき。

→過去の事例で浮き上がった問題を改善していく

流れ

- ① 3.11 で浮き上がった問題点
- ② 世界の他の自然災害でもある程度同じことが言えるだろう
- ③ 結論

→この三本柱で進めることに

3.11 で特徴的だった問題

情報化社会であるという視点から三つ挙げる

○原発が安全であると決めつける過小評価

- ・津波を甘く想定しすぎる
- ・原発が安全だと決めつける
- 前例を最大値と見ず、それまで以上の事態を想定するべき

○政府から正しい情報が来なかった故の間違った対処

- ・ボランティアがどう動けばいいか分からず余っていた
- ・民間が動きづらい
- 正しい情報が足りない
- 地方自治体と連携して情報流通システムを確立するなどはどうか
(これは風評被害の問題とも共通する)

○被害を過大評価する風評被害

- ・政府など、内情に通じているものが情報を溜め込んでいた
- 早く開示するべき

⇒政府が情報をうまく扱えなかったために国民が正しい対処をできていないことが分かる

流れ決定

1) イントロ

「自然災害とは」…定義

→不可避である。強大で到底人間の手にはおえないもの

→過去の事例などで対処していこう今持っているもので使えるものを使おう

情報があればしっかりとした行動が取れる。安定した生活のためには不可欠。・・・※

2) 日本の被害状況

3) 3つの問題点について

日本での例を挙げる

⇒結論

4) 地震に限らず情報は大事

5) 3.11 ではこのようなことが分かったから、世界でも参考にしてほしい

6) まとめ

Conclusion (仮)

国民が冷静に対応できるように、政府は正確な情報を迅速に発信しなければならない。

※) 日本の例を挙げる前に、「情報が大切」という一段階前の結論を述べる。

→どう活かすか？

→政府が国のトップとして情報を握っているので、これを公開すればよい

→情報が伝わってくるまでの煩雑さをなくしたい。それには、前提として政府の動き自体が迅速である必要がある

→災害専門の機関を作り、情報の出所を一つにする。政府がしっかりと法的拘束力がある指示を出すためにも、前述の「想定は科学的に実証され得る最大限まで」というのは必要不可欠。尚、この指示を出す際に、言い方は強めにする。(ex「動いてください」→「動け!!」)

これではありきたりすぎるのではという意見。政府がどうこうするべきという議論にさほど意味はないのではという意見。

→しかしあまり具体的な策を出すとプレゼン後質問攻めにあい、理論を通せなくなるかもしれない。だがありきたりなのは確か。

→結論部に改善を施すべきということでもとまり、出発の三日前から変更開始。

二つの問題を具体化

① 現在国民向けに発信される情報は災害の専門家たちによる考察に基づいたものであるが、彼らは一体どこから現場の状況を知り得ているのだろうか。果たして正しく把握できているのだろうか。

② 情報は専門家から政府、メディアを通して伝達される。仮に専門家たちが正しい情報を流せたとしても、

その中には政府やメディアにとって都合の悪い事実が含まれているだろう。そうした機関の都合で歪曲されれば、正しい情報が国民に伝わるはずがない。

迅速な情報伝達手段として SNS を提案

○利点

- ・全世界に瞬時に情報を拡散できる
- ・政府のみならず全国民が情報の発信者となり得る

○欠点

- ・誰でも発信者となれるが故に膨大な情報が錯綜し、信じるに値するものを選び出すのが困難

→SNS 利用の問題点

情報量は膨大だが、素人が発信したものにはあまりにも信憑性がない。信憑性のある情報を選別する手段が必要。

解決策

災害発生時に被災者たちに迅速な情報を提供するデータベースを SNS 上に確立。

そのデータベースに投稿する権利を「資格」として設定し、国民にその認定を与える機関を設立。

資格の判断基準は、災害に対する正しい知識を持っているか、仮に自分が被災したとしても冷静に判断し行動する能力があるかなど。

政府が呼びかけをし、全国にこの資格者を配置する。これは人口の約 5% で十分だろう。

そして、被災地にいる資格者たちがリアルタイムでこのデータベースに投稿する。

Conclusion

災害時に国民に正確な情報を迅速に伝える手段として、SNS を活用する。

資格を持った人々からの安定して正しく、かつ膨大な情報の中から各個人が信じるべきものを判断し行動をとる。

文責 野辺宣翔
山下鈴乃

Feedbacks

麻布高校

野辺宣翔

APYLS への参加

僕は将来、体の不自由な人の動きを補助するための人工的な手や足といったものを開発したい。脳や神経からの信号に反応して動く、いわゆるアクチュエータというものだ。アフリカについてのある番組で、戦争で傷ついた人々を見てから僕はこう思うようになった。地雷で片足を失った少年が松葉杖でサッカーをする映像は、2年経った今でも鮮明に覚えている。また災害や病気も同じように人の自由を奪う。世界中に数多く存在するそれらの問題について知り議論することができるという点で、APYLSは素晴らしい。しかしあくまでも理系の僕は、外交官などを目指す同輩たちにこの機会を譲ろうと考えていた。そのため親や友達におされて校内選考を受けたときは、受かったら行くかあ、という程度にしか思っていなかった。その時のことは猛省しつつも、結果行って本当によかったということははっきりとっておく。

ありがたいことに校内選考を通り、麻布の二人や筑波と下関の仲間とともにサミットにむけての準備を始めることとなった。近い筑波とはお互いの学校やファミレスで何度か会って話し合いをしたが、三人の第一印象が多田と山下はスポーツ少年少女、大夢はバンドやっていてモテそうという感じだった。多田と山下はわりとそんな感じだったように思う。そして大夢くん笑。でもみんなの前でアコギを披露したときは素敵でした。下関の三人は現地で初顔合わせとなったわけだが、Skypeで話す限りはみんな真面目という印象だった。実際にはそうでもなかったと言うと失礼だが、とにかく会ってすぐ打ち解けられる楽しいやつらだった。こうして仲のいい日本チームに恵まれたのはとても幸せなことだ。いいプレゼンやパフォーマンスを作り出すためにはもちろん、現地で言葉の壁にぶつかったときに助けあえるという意味でもこれは重要である。

それでは出発までの準備期間について。まず Cultural Performance の準備、Cultural Exhibition の準備、プレゼンテーションの原稿の作成、パワーポイントの作成という役割分担をし、僕は日本の品々を展示する Cultural Exhibition を担当することになった。今年は、「侍」や「武士」などリクエストされた文字を裏が無地のうちわに筆で書いてその場でわたすという企画をやり、それが海外の生徒たちには好評だった。書道のできる岡本さんのおかげだ。また、コマやけん玉などは定番の品だがこれらは浅草でだいたいそろったように思う。ちなみに日本文化ということで秋葉原に行ってみても良いと思う。今年は行かなかったので、これからの後輩たちには日本のもう一つの顔を紹介してもらいたい笑。あと一つ後輩へのアドバイスとしては、品々を持っていくときはメンバーにうまく分配することを忘れないでほしい。空港にはスーツケースの重量制限なる厳しい決まりがあるのだ。ちなみにこの準備期間で一番壮絶だったのは、出発二日前からのプレゼンの変更だろう。僕は Cultural Exhibition の担当だったのでプレゼンの作成の話し合いにはあまり参加していなかったが、三日前から原稿にいちやもんをつけたしたのは他でもないこの僕なのである。後輩たちは役割分担をするのはいいが、どの話し合いにも全員が最初からしっかり参加するようにした方が良いと思う。

そんな出発前を過ごしていたころ、僕はもう出発が待ちきれなかった。自分たちが三ヶ月かけて準備してきたものを、世界中から集まった「リーダー候補」たちに披露してやるのがただ楽しみだった。そして7月14日、僕は希望と、うちわなどで巨大化した荷物を持ってシンガポールへ出発した。

APYLS を通して

僕は前にべつのサミットを経験しているほか学校の国際交流プログラムにもよく参加し、また英語もそれなりに得意だったので大した不安は抱いていなかった。そんな僕を最初に驚かせたのは、しょうもないことだが、かの有名なシングリッシュだった。生徒によって発音はまちまちだったが、失礼ながら英語なのにもはや英語ではない言語を話す子もいた。しかし考えてみれば、世界にはノン・ネイティブスピーカーの方が圧倒的に多いのであって、彼らとも円滑にコミュニケーションがとれるように僕らはもっと英語に慣れ親しんでおかなければならないということである。ちなみに僕をこの次に驚かせたのは、男だと思って Facebook で連絡していたファシリテーターの **Kaishi** が、実は女の子だったことだ。ホームページの写真を確認しなかった僕が悪い。

さて、英語力で困った話は他の人に任せるとして、僕は文化の違いについて話したい。一番文化的な距離を感じたのは、もちろんイスラム圏である。サウジアラビアとオマーンの生徒たちは日の出前から礼拝したり、日中は水も口にできなかったりしていた。僕の唯一のルームメイトだったサウジの **Talal** は、水を飲めないで汗をかかないようにといて部屋の温度を 16°C に設定していた。僕にはあまりにも寒かったので話し合いのすえ 22°C で落ち着いたが、同じようなことが他の部屋でもあっただろう。このような異文化理解こそが国際交流の醍醐味であり、僕は大好きだ。ちなみに中国や韓国は日本と似ていてよく気が合ったり、アメリカやイギリスは特に親切で社交的だったり、イスラム圏はなんだか独特の雰囲気を持っていたり、文化によって人間性も変わってくることを感じることもできた。

話は変わるが、今回の APYLS のテーマ “Leadership by Example” とはなんだろうか。 “Example” を辞書で引いてみれば「実例、前例、手本」と出るが、いまいちピンと来ない。APYLS のホームページによれば、「グローバル化の中で複雑に絡み合った国際問題をローカルなレベルから解決していくために、各個人がリーダーシップを持つべき」ということだ。 “Example” 「前例」という意味を考えると、「前例をもとに状況に応じて問題を解決へ導ける人それぞれがリーダーになるべきだ」ということだろう。しかし僕の場合国際問題について議論する中で「世界は変わらなければならない」という意識は生まれたが、リーダーシップはというと今回それを発揮していたのはむしろファシリテーターたちのほうだった。だから僕が個人的に言うのであれば、この “Example” 「手本」は 70 人以上の参加者を引っ張ってくれたファシリテーターたちのことなのかも知れない。

最後に

ところで今回の日本チームには帰国子女が一人しかいなかった。正直「英語を話せるようになること」を目指しているとは思えない日本の英語教育を受けてきた僕らが、他国の生徒たちとまった

くの対等で議論を交わすことはできないのは承知していた。しかし僕が思ったのは、色々よく考えているのはむしろこっちの方で、英語さえ話せれば十分に議論できるということ。そこで僕ら日本人が越えなければならない壁は二つある。

一つ目はもちろん、英語力の壁だ。失礼ながら今のビジネスマンの方々がいい例だと思うが、早いうちから英語に慣れていないと将来絶対に苦勞する。受験英語というものにしか触れていない僕らは、いくら成績が良くても自分の考えをまとめ上げて口から発することには結局困難を要してしまうのだ。

そして二つ目は「自信」の壁だと思う。質問や意見はありませんかと聞かれても誰も手を挙げない、というのは日本でよく目にする光景だ。しかし思ったことが一つもないなんてありえないだろう。「バカな質問だと思われないかな」「こんな意見言うまでもないよね」と考えているうちに時間が過ぎ去ってしまう。これほどバカなことはない。「日本人の謙虚さ」を履き違えていると思う。分からないときにははっきりとそう言うことの大切さは、言語の壁にぶち当たったこの APYLS でよく学んだ。それを理解したら、次は自分の言いたいことを自信をもって言うのだ。海外の生徒たちはそれを当たり前のようにやっていた。

日本人は昔から勤勉な人種だ。しかし真面目すぎるが故に、人に反対して自分の考えをぶつけることには躊躇してしまう。そんな僕らが世界中とコミュニケーションをとれるツールを身につけ、自信をもって立ち向かえば、そこに敵はいないと思う。

最後の最後に

最後まで読んでくださってありがとうございます。結局言いたいことは、**APYLS が最高だ**ということに尽きます。後輩たちにも期待しています。ここんとこ二年連続で優秀賞だからね、頼むよ笑。サポートしてくださった皆さん、ありがとうございます。村上先生、オセロばっかやってたけどほんとと感謝してます。Kaishi にはいくらありがとうと言っても足りません。そして日本チームの 8 人、君たちは一生の友達です。本当にありがとう。

隈井亮太

1 プログラム参加までの経緯

僕は麻布に入ってから英語に出会ったので、『英語には全く不安がなく、…』なんて到底言えません。しかし高 1 の夏の 1 ヶ月間、中国に短期留学をした頃から、国際交流に興味を持ち始め、海外への苦手意識はあまり持っていませんでした。そして部活の先輩である岡本さん（前代表）から勧められ、このプログラムを知りました。

学校の選考には 15 前後の生徒が応募し、英語の面接をするというスタイルでした。事前に質問内容が知らされていたのですが、準備するよりも自分の力を出さなければ、あっちで通用しないと思い、『何のために行くのか?』ということだけは考えておきました。面接は準備をしていなかった分、逆に自然体で居ることができ、無事に通過しました。

学校の選考が終わり、約1ヶ月が経ったあたりに、筑附のメンバーと顔合わせをし、プレゼンやパフォーマンスの大まかな計画を立てました。そして下関のメンバーとは Skype や ML で交流しました。プログラムまでには何度か Skype 会議を開き、代表9人全員で話し合いをし、具体的なことについては、麻布と筑附のメンバーが直接集まり、話し合いました。結局、プレゼンについては出発直前の話し合いで大幅に修正し、現地で練習をするという形でした。

2 プログラム

正直楽しいことばかりではありませんでした。僕は自分の英語が通じるかどうかすごく不安であったので、発音矯正とリスニングの練習は前もって行ったのですが、周りはそんなレベルではなく、初日から圧倒されました。

最初の壁はルームメイトとの共同生活です。僕たちは Hwa Chong の寮に泊まるので、2人部屋か4人部屋で、異なる国のメンバーになります。僕の場合は中国、マレーシア、フィリピンでした。幸いにも3人とも凄く優しく、相手の生活スタイルを尊重しながら、国や趣味、くだらない事などたくさん気楽に話せました。プログラム中辛い時も、自分の部屋に帰ると落ち着き、またいろいろと助けられることもありました。今でもたまに連絡を取り、仲良くしています。これに関しては、メンバーにもよると思いますが、あまり苦労しないと思います。

次なる壁は訪問する先々であるプレゼンテーションです。これに関しては去年の先輩方から、『シンガポールを宣伝している感が半端ないから面白いよ』と言われたので、前日に訪問先の情報を調べた上で、期待して臨みました。プレゼンなのでパワーポイントを利用したものが多く、また大体の内容を予想していたので、意外とすんなり理解できました。しかし質疑応答の時間に、みんなが積極的に質問をする姿に圧倒されてしまい、一回もすることができませんでした。僕の場合は、日頃の習慣通りメモを取り、自分の中で反復しながら理解していったのですが、みんなは話を聞くだけで理解していたようなので、ここが大きな差だなと感じました。

3つ目の壁は Student Dialogue です。これは各国がそれぞれのテーマについてのプレゼンをした後に、4つのグループに分かれてディスカッションをするものです。このテーマも事前に告知されており、現地で貰う冊子には各国のプレゼンの方向性が書かれていたので、どんな内容になるのかは把握できましたが、結論があんまり理解できなかつたり、言葉が早すぎて聞き取れない場面もありました。グループディスカッションにおいても、アメリカ・イギリスが主導権を握り、議論が両国のあいだで飛躍することがありました。しかし数十人で1つのグループであるので、自分の意見をじっくり考えることができ、いいタイミングで発言することができました。また2回目以降は Facilitator が議論中の発言をメモってくれたので、議論の内容がわからないということはありませんでした。しかし、1時間ほどの議論の中で発言できたのは多くて3回ほどで、議論の中心になることは不可能でした。けれど先進国と発展途上国の意見の対立が顕著に現れ、国同士で全く意見が違ふということを実感しました。

本来のプログラムの目的である、これらのイベントはある程度自分なりに理解し、楽しめたと思います。しかし僕にとっての最大の壁は、食事時でした。

2人や3人で話をするときと異なり、大勢でしかもフツワーの話をするときは、話が次から次へと展開され、また表現も難しく、発言をするタイミングが掴みにくかったです。最初の方はそれでも頑張っって積極的に会話に参加しようとしたのですが、海外の文化に疎かった僕の発言は少しはずれだったらしく、場の空気が変になることがありました。そのためこの時間はリスニングの勉強だと割り切って、食事に集中しました。

ここまでは主に英語力での苦労を述べましたが、寮生活自体はすごく快適でした。というのは、現地の Facilitator がものすごく優秀（おそらく各国代表よりも）で、参加者全員に目を配り、いろいろなことを手伝ってくれたからです。困ったことがあるときはどんどん質問をしていいと思います。

3 プログラムを通じて学んだこと

まずはシンガポールの凄さです。前々から国土が狭く、資源も無いに等しい小国がどうして急成長しているのかが不思議でした。出発前に自分で調べたり、筑附で講義を受けたりして大体の知識は持っていたのですが、実際に訪問したことでより深まった気がします。日本に比べて国内だけではやっていけなく、また一党独裁であることが原因であるとは思いますが、Hwa Chong の生徒だけではなく、民間の人もバイリンガルなのは当たり前で、海外に目が向いていることが大きな違いだと感じました。また国を挙げてのプロジェクトが多々有り、それらが一定の成果を上げていることも実感しました。交通や食などの生活面においても、日本と差がなく、全く困りませんでした。

次に英語の必要性です。これは国際交流に参加しているのでもいつも感じてはいるのですが、今回はそれが前提であり、いかに自分の意見を相手にうまく伝えるかという次元でありました。また話のネタをたくさん持つためにも、常日頃から海外の情報やファッションについて関心を持ち続けることも重要であると感じました。

最後に意見の多様性です。我々日本人は島国であるということもあり、海外の意見については疎く、国内の意見が全てだという感覚を抱く人が多いと思います。しかし今回のプログラムで色々な国々の代表と意見交換を行ったことで、国ごとの背景でいかに意見が異なるのかということ強く感じました。特に興味深かったのは、前述したように先進国と発展途上国の意見対立です。このことについては国内においても考えさせられることがあります。自分の予想をはるかに超えていました。日本では特殊な意見は受け入れ難く、意見が一致することを善とする風潮がありますが、これは明らかに間違っており、世界全体が成長に向かうためには、多様な意見を認識し、それらについてお互いが理解し合うことが重要であると思いました。

4 プログラム参加における注意点

最後にこの冊子を手取る人の中には、参加を検討している方がいると思うので、参加したものからのアドバイスを述べたいと思います。

まずは体調管理から。シンガポールは一年中暖かいので、気候の変化で苦しむということはありませんでしたが、訪問先で異常に冷房が効いていました。さらにルームメイトに中東系の子がいる

と、部屋の冷房までガンガンにするので要注意。どんなに暑くても、上着を携帯することを強くおすすめします。

次に仲良くなるきっかけ作りです。僕はどうにかなるだろうと思い、何も準備をしていなかったのですが、日本のメンバーの多くが名刺などを用意し、参加者に配っていました。これは自分のことを認識してもらおうということに加え、日本の文化を伝えるという面においても良い方法であると思いました。また僕はチェスが得意であったので、チェス盤も持ってゆけばよかったと後悔しました。要は自分の得意なことを簡単に表現できればいいと思います。

最後に仲良くなるにつれて困ったことです。女子でどうなっていたのかはわかりませんが、男子の間では4日目あたりから『誰がいいと思う?』みたいなノリがあります。僕は特に関心がなかった(あるいはそんな余裕がなかった?)ので、第一印象が良かった子がいいとテキトーに答えました。するとみんなが話すきっかけを無理やり作ったり、話していたりするといちいち面白がるので、正直面倒でした。最終的にその子とも変な感じになってしまいましたし。なのでこのような話になった時には、ドヤ顔で『俺、彼女いるからさ!』と答えてみたり、日本人のメンバーを指名して、後で説明をするというのが得策だと思います。

APYLSは普通では体験できないことが盛りだくさんでした!

最後にいろいろと手助けをしてくださった先生方や先輩方ありがとうございました。

APYLSサイコー!!!

酒井直

シンガポールでの10日間は正直しんどかったです。言うまでもなくみんな英語を使うし、プレゼンの原稿は前日まで満足の行くものにならないし、ソーラン節は全然覚えらんないし、暑いし、夜は寒さで全然眠れないし、いろいろ大変でした。でも楽しかったからそんなことはみんなどうでもよしとします。もちろんそんななかでもイベントがたくさんあって盛りだくさんの10日間でした。その中でいろいろなことを見聞きし、感じました。そのなかで伝えたいことを二つ、この3000字に込めようと思います。まず一つ目は **facil** についてです。

facil とは **facilitator** の略なのですが、その **facil** の役割の一つは我々 **visitor** の面倒を見ることで、各校にそれぞれ一人ずつ担当の **facil** がついています。チャンギに降りてから飛び立つまで、**facil** は不慣れな僕たちが円滑に日程をこなせるよう、担当の学校のメンバー全員を生活面でサポートしてくれます。ということで、麻布の **facil** を務めてくれた **Kaish** のしてくれたことを参考に、この学校担当としての **facil** の役割を紹介します。

麻布はチャンギに現地時間早朝、まだ空が暗い時間に到着する便で行ったのですが、そんななか空港で出迎えてくれました(そのときは他の **facil** も数名いました)。会ったばかりなのに、そして朝早いのに、すごく気さくに話しかけてくれて、荷物もみんなまでタクシーまで運んでくれました。

(僕たちは夏休みでしたけど彼らはそのとき学校が平常時だったので、宿題も多いらしいし、結構眠かったはずです。) 期間中も、Kaishはこの手の焼ける麻布の三人を最後までサポートしてくれました。事務連絡の伝達や構内案内などの基本的なことに加え、夜のフリータイムにナイトサファリやダウントウンに連れて行ってくれたり、暑いから水を飲むようにとか具合は悪くないとかこまめに話しかけてくれたり、暇な時は雑談を挟んでくれたりと、ほんとにいろいろな面で支えてくれました。さらに、誰かがルームキーをなくした時や、誰かがいるべき場所にいない時などのエマージェンシーにも冷静に、的確に対応していました。帰りには到着したとき同様空港に見送りに来てくれました(麻布は発つのが一番最後だったので10名近くのfacilが来てくれました。嬉しかったです)。

そして、こっちがfacilのメインの役割なんですけど、企画の進行という重大な任務を彼らは負っています。しかも教員しかできないことを除いてすべて彼らが行っているんです。最初のチェックインから始めて、必要なことの告知、各チームの打ち合わせのための部屋割り、バスの振り分け、プレゼン機材の準備、訪問先との調整やそこでの参加者の先導などなど、ありとあらゆる必要なこと一通りから、就寝時間を過ぎても打ち合わせをやめない日本チームを寮に帰らせたり、最終日の調子に乗って徹夜する流れになって部屋に戻ろうとしない人たちを寝るように説得するといったイラッとくるようなことまですべて、彼らの力でやっていました。僕がわからないことがあって事務所に行くとみんな忙しそうにしている、それでも丁寧に対応してくれましたし、日程が書いてある大事な冊子をなくした時もすぐに新しいものを持ってきてくれました。

終わってみればただただ普通に、淡々と全日程が終了したわけですが、このfacil主導の体制でこれほどの規模の企画を混乱もなく無事終わらせたというのは心の底から驚くべきことでしょう。visitor73名(内シンガポール人12名)に対しfacilは23名ということも考慮すれば尚更です。facilたちは各場面における的確な判断力や、それを可能にする優れた情報を収集、整理する力をもっています。そして、細かいところまで気が回る思いやりをもっています。

さらに忘れてはならないのがfacilのキャラクターです。こんな大変な日程をこなしつつも、誰一人笑顔を絶やさず、その時々を楽しみ、みんなを楽しませました。Kang Mingは面白さの塊みたいな人だったし、Aletheaはそのテンションにもっていかれてしまうくらいイケイケな感じでした(本人に会わないとどのくらいどうなのかはわかるはずないですが、それでも書きたくなるくらいすごいってことだと思ってください)。彼らのこの振る舞いは期間中の雰囲気をよくし、心地よい空間をつくりだしていました。このことは、この企画を成功させた要素の一つでしょう。明るさ、風通しのよさ、爽やかさといった、円滑なコミュニケーションに不可欠な要素を彼らは備えています。

思えばこの企画の名前は"Young Leaders Summit"でしたが、その参加者以上に主催者が優れたleaderの姿を示しました。高い学力を有し、機知に富み、清潔感あふれ、人を飽きさせず、快活である彼らは、その素養をleaderとして、期間中余すところなく発揮しました。その一方、一応leaderの一人として参加した自分はどうかでしょうか。正直ここまでのパフォーマンスを要求されてもできる自信はありません。このような資質は教科書をよんですぐに身に付くものではありませんから、彼らを意識しながら、日々の些細な振る舞いから少しずつ変えていけるように心がけています。

さて、もう一つは何かと言えば多様性についてです。いろいろな国際交流の企画があるなかで APYLS の大きな特徴の一つは、12ヶ国の国々から学生が集うということでしょう。参加者は日本人にとってなじみのある中国、韓国、アメリカのほか、東南アジアのシンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、南アジアのインド、欧州のイギリス、中東のサウジアラビアとオマーン、南半球オセアニアのオーストラリアというように、言語、文化、宗教、気候、食生活、習慣、さらに経済水準、生活水準など、様々な点で異なる国々からのメンバーで構成されています。そんななか実際にこの目で、この肌で、異文化と、異国の人を体感することができたことに大きな意味を感じています。ムスリムの友達は聖地の方向へ頭をつけてお祈りしていましたが、クリスチャンの友達は食事の前につぶやきながら十字を切っていました。本物のベジタリアンもいました。体感温度が違うことも痛感しました。このような具体的なことだけにとどまらず、イギリスは **lady** と **gentleman** の国なんだな、アメリカは自由の国なんだな、インドネシアは南の島なんだな、ムスリムの人は敬虔なんだなというように、聞いたことがあるだけの漠然としたイメージの輪郭がよりはっきりしたように思います。

対局的な言及をすれば、僕は国際交流とは英語を試したり、上達させる場ではもちろんなく、そして今回の企画は **summit** でしたが、討論の内容を求めるものでもないと改めて思いました。というのも、それらの能力は日本にいていくらでも伸ばせるからです。そうではなくて、もっと「差」を生かすべきだと思います。上記の通り国が変わればあらゆることが変わります。国際交流は日本にいては得られないような新たな視点を与えてくれます。そして日本にいては気づかない文化が異なる故の違いに気づき、それだけにとどまらずそもそも違いが存在するという忘れがちな、大切な事実を自覚させてくれます。いいかえれば、視野を広げ、想像力をたくましくしてくれるということです。そして僕は、上に示したことをはじめ様々な点で、自分が新しくなったと思っています。

最後にこういう機会がないと言えないことなのでこの場を借りて。言葉が不自由なのに、武骨なのに、いろいろ話しかけてくれた **Andrew, Suyin, Holly, Diego, Samuel, Luke** はじめ **delegate** のみんな、いろいろ楽しませてくれた **Edmund, Alethea, Melissa, Chloe, Glenn** はじめ企画を支えてくれた **facil** のみんな、ありがとう。下関の岡本さん、金城さん、凜君と藤井先生、筑附の誠之郎、大夢、山下さんと速水先生、他校よりも長い日程につきあってくださった村上先生、今年は関係ないのに熱心に手伝ってくださった杉浦さん、これからもよろしくお願ひします。そして、いつも助けてくれる亮太と一番熱心にこの企画と向き合っていた宣翔、この先も共にがんばっていきましょう、負けないけど。そしてそして、最大の感謝と敬意を捧げるべきであるでしょう、期間中は全力で僕たちを支えてくれて、いまでももわざわざ手紙をくれて海の向こうで応援してくれる、麻布の **facil**、**Kaish**、心の底から感謝するとともに、尊敬しています。何はともあれ、みなさん、ありがとうございました！

筑波大学附属高校

和田大夢

シンガポールで過ごした最高の 11 日間から、この文章を書いている現在では、数ヶ月の時間の隔たりがあるものの、サミットで経験した様々な出来事は、今も頭の中に曇りなく鮮明に蘇る。

普段は決して会えることのないような、様々な国からやってくる同年代の学生との交流は、今まで自分が暮らしてきた、日常の壁を打ち壊すような新鮮な発見に溢れていた。ここでは、自分が APYLS で経験し、感じたことをまとめていこうと思う。

1. APYLS での活動について

サミットが開催される 10 日間には、ところ狭しと様々なイベントが詰め込まれており、後半になれば、大分体に疲労が蓄積されたほどであった。イベントは大別すると、シンガポールの施設や機関へ見学に赴き、その役割や仕組みを学ぶものと、生徒による様々な国際問題に関するプレゼンテーション、そしてそれらをトピックとした生徒間でのディスカッションを行うものに分けられる。前者の方では、シンガポールが将来的にどのような国家になることを目標とし、どのような試みをしているのか、ということをや々と聴く形になった。シンガポールは、世界の中でも稀に見る狭い国土の中で、物質的資源には乏しいというハンディキャップを抱えながら、非常に割り切った行政を行っている。国の抱える状況がまた異なる日本に対して、シンガポールのやり方をそのまま当てはめることはできないが、学ぶべき点は多いと感じた。特に自分の興味をひいたのは、シンガポールの政府が運営する公団住宅で、国民の大半がここに居住し、政府は国民の生活環境の改善の為に常に努力している、という構図はシンガポールのような小さな国ならではのやり方だと思った。また、国が何か新しい事をしようとする際に、様々な利権や既得権益が絡んでなかなか素早い一歩を踏み出せない日本の行政と違い、国家の隅々にまで政府の目が行き届き、効率的に、素早く管理できるのは大きな強みだと思った。

プレゼンテーションでは、環境、人口問題、貧困、自然災害、南北問題などの主要な問題についての解決策の数々が、各国のプレゼンで語られたが、現状や問題点を整理しても、それに対して有効な解決策を提示するのは、やはり高校生の立場からでは難しいようで、なるほど、と思えるような秀逸な意見を各国が皆出せている、という訳ではなかったようであった。逆にそういったことから、国際問題を解決していくことがいかに難しいことなのか、身をもって知ることができたと思う。世界のリーダーが取り組んでいることに対して、同じ視点で解決策を見出そうとするよりかは、「青少年アジア太平洋ヤングリーダーズサミット」とあるのだから、今の自分達の持つそのままの視点から、国際問題に対して取り組んでいく、という形でも良かったのではないかと今では思っている。ディスカッションでは、早口の英語が次々と飛び交い、話の内容を捉えていくだけで多大な労力を要した。自分は帰国子女のように、言いたい事なら何でも、すぐに英語で話せる訳ではない為、話の流れから次の話題となるであろう事柄を予測し、事前に話すことを頭の中で考えておくようにした。といっても、発言できた回数はそれぞれディスカッションにおいて数回程度であった。サミット中で、一番の山場となったのがこれらのディスカッションであったことは言うまでもない。だが、

自分の発言したことが会議のまとめに取り上げられたりした時はとても嬉しく、「国際協力」の片鱗に自分が確かに関わっていることを強く実感した。これらの経験は、サミットの中での最も貴重な経験の一つであったと自信を持って言える。

2. APYLS での生活について

基本的に、日々の生活の中で特に困ったり、大変だったりは無かった。食事は日本のものとは味付けがやや異なるものの、普通に食べられるものだったし、寮内では色々な施設が整っていて、HwaChong は本当に豪華な学校だなと何度も驚かされた。見学に行く時は全部バスによる移動で、公共の交通機関を利用する機会は一回もなかったのは残念だったが、二台のバスのどちらに乗るかの組み分けは毎回異なり、移動中は様々な生徒と話すことができよかった。また、食事の席では円卓を取り囲んで座るので、自然と周りに座っている人とは目が合い、色々と細々した事を話したりすることになる。サミットが始まって数日経つと、大体は一緒に行動するメンバーが固まってくるようになり、内輪で楽しく、ふざけた話をしあえる程になり、人種、国籍、言語が違って、結局は同じ年代の学生であることを実感した。自分は元々、人間関係において受身なことが多い性格だったので、相手に積極的に声をかけていたり、輪の中に入っていこうとすることを通じて、以前よりもオープンマインドな性格になったと思う。サミット中のイベントには、ただ単に何かを学んだりすることだけに留まらない、参加者を色々な面で成長させてくれる要素がたくさんある。イベントだけに留まらず、APYLS 全体で最も大切なことは、何事に対しても積極的に取り組むこと、これに尽きるだろう。極論を言えば、特に何も目立つことをせずに、隅でダラダラしているだけでもイベントはこなせてしまう。サミットでの経験を、自分にとって最大の効果を持つものとしたいのなら、日本ではありがちな、何か目立つことをすることへの遠慮の感情は、この場では障害にしかならなかった。サミット中では、ファシリテーターは参加者に対して”delegates”(代表者)と呼びかける。自国の中から選ばれた代表者の一人として、堅くなる必要はないが、自信を持って堂々と他国の「代表者」と交流するのが大切だと思う。

3. これから APYLS に臨む後輩達へ

英語に熟達した帰国子女であれば、おそらく最も大きな問題になるであろう言語の壁は殆どなくなるといっても過言ではないが、日常会話レベルの英会話を難なくこなせても、専門用語を用いたディスカッションではよりレベルの高い英語力を期待されるため、事前にテーマを予習しておいて損はないだろう。逆に、自分の様な、海外経験がほぼない人間にとっては、言語がどうしようにも埋め難い穴となることも十分ありうる。そんな場合でも、とにかく気圧されることなく、前向きに、積極性を失わないでいて欲しい。日本人の英語レベルは、概して他の国と比べて最下位と言っても差し支えない現状であるが、自分の伝えたいことをはっきりとさせ、真摯に相手に向き合えば、それが相手にないがしろにされることはまず無いだろう。そして二番目に重要な要素が、前述の通り、何事に対しても積極性を失わないことだ。サミットにくる生徒達は、皆が高い志を持っている。その中で埋もれずに、日本のリーダーとしての誇りを持って、全てを学び取る心意気でサミットに望むようにすれば、そこでの体験は、人生の中で何にも代え難い、最高のものとなることは間違いないだろう。幸運を祈る。

多田誠之郎

APYLS は、間違いなく自分の人生の中で一番濃い時間だったと思う。大げさではなく、この 10 日間で自分の物の考え方が変わったと思っている。期間中に体験したことは、全て今の僕自身の中に残り、活かされている。そんなこの 10 日間を、あくまで僕の目線からまとめていきたい。今回の APYLS がいかに素晴らしかったものかが少しでも伝わればよいと思う。

I. 外国の高校生と接する、という機会について

異文化と接する、というような硬い、つまらないイメージを持たないでもらいたい。確かに、本当に世界中から人が集まり、初めはほとんど国際経験の無い自分も、驚き、思わず身構えてしまったことは今でも覚えている。しかし、なんといっても僕らと同じ高校生なのである。なんの問題もなく、すぐに友達になることが出来た。

まず、英語力に関して話したい。英語が苦手な自分の率直な感想は、日本は言語が英語で無い分、やはり損をしているのではないかと、ということ。損、と言えば自分がひがんでいるように思うかもしれないが、そうではなく、国際社会において、だ。日本人の“積極性”もこのことと大いに関係があるのではないだろうか。友達と議論を繰り返すうちに気付いたが、むしろ日本は世界の目標とされているような国である。トップだけが英語を話すことが出来ても、国民レベルで国際競争に飛び込めない日本はやはり不利だ。言語面で損をするのは非常にもったいない。ただ、相手も聞いてくれようとしてくれていて、そこは助かった。日本人で言葉に差し支えない人も確かにいたけれども、英語は、コミュニケーションの前提、と言った方がいいだろう。それがあって初めて世界が広がる、ということ、身を以て痛感した。

僕のルームメイトは Andy で、Hwa-Chong の生徒だった。彼はそこでの生活に慣れきっていたため、少し不安に思いもしたが、そんなことはまるでなかった。朝 5:30 に筋トレの約束を半強制的に結ばされて、彼自身は 6:30 までご快眠、なんてこともあったし、他の Hwa-Chong の生徒ともすぐに打ち解けられた。夜の雑談中に、急にお祈りを始める子もいた。こういう類の話は、今でも鮮やかに覚えている。本当に、Delegates、Facilitators、全ての子と親しくなれた、と自信を持って言える。異文化に触れよう、などと意識したことは一度もない。気づいたら、色々な文化の波に揺れている、といった感じであるし、日本も大きな波を作って、他の国の子を巻き込んでいたような雰囲気だった。

ただ、ここで強調しておきたいのは、無駄話だけではなく、国をまたいでしか出来ないような話も数多くした、ということだ。文化の話で言えば、マンガや音楽 (ex.いきものがかり) の話、そして東日本大震災に関して、アメリカの Jacob には地震の感覚を話したりもした。下らないことも数えきれないほどしたが、彼らとの関係があったからこそ、ここまで APYLS を有意義にすることが出来たと感じている。10 日間で築いた友好関係をはっきり感じたのは、Closing ceremony だ。国の文化紹介を兼ねたパフォーマンスを披露しあい、拍手しあい、最後に We Are The Champions や Payphone を、全員で肩を組んで歌ったことは、本当に忘れられない。全員が一つになった瞬間だった。

この機会ですぐに友達はかけがえのない友達だ。ありきたりな言葉で、僕の思いが全て伝わっていないような気がするが、10日間寝食を共にし、議論しあい、笑いあったことは、一生忘れることはない。

II. プログラムについて

シンガポールの機関を巡るプログラムの全体のまとめと言えることは、シンガポールは急成長中であるということだ。どの機関を訪ねても右肩上がりのグラフが出てきて、必ずそれは先進国を追い落とさんとする勢いで伸びており、その中に日本も入っていた。実際シンガポールには、市街地からも、整備され先進的な雰囲気が醸し出されていたし、政府などの機関での説明を聞くと、目を見張るような斬新かつ大胆な政策や試みが試されているというのがわかった。普段は訪ねることのできないような大統領府や、シンガポール警察、GICを訪ねられたことは、とても貴重だったと思う。

施設訪問などは以上として、やはり何と言っても **Student dialogue** だろう。それぞれの国が担当のテーマについて発表し、その後国籍関係なくグループ分けされた後に議論する、というものだったが、この議論。発言が、止まらない。手が挙がらないような状況は1秒もなく、参加者の積極性がうかがえた。様々な視点からの意見があって、非常に深いものとなった。議題によっては、先進国と途上国の対立の図式が目に見えるようなものもあったし、宗教に絡むようなこともあった。日本は自然災害に対する迅速かつ正確な対応方法について、SNSを取り入れた、斬新でかなり濃い発表が出来たと自負していたのだが、自分のグループで言われたくないと思っていた問題点をさらっと言われたりもした。本当に、得るものが多かった。最早国籍など全く関係なく、議題の内容以外にも、参加者がどういう態度で臨んでいるのか、司会進行はどう効率的に話を進めているのかなど、大変参考になった。自分ももっと議論に参加して白熱し、充実させたいと強く思ったが、今一歩英語の実力不足で、ほとんど聞いて終わってしまった。

そして、さらに一歩踏み込んで、日本チームの話。日本は、APYLSのだいぶ前から、直接・間接的に話し合いを繰り返し、ソーラン節の踊りを覚え、準備が一番していたように思う。だからこそ直前に結論が踏み込んだものに変更になってもまとめることができ、そのことには誇りを持っている。残念ながら、他の人にとり仕切ってもらい自分は割と能動的に参加できなかったが、濃密なものが出来た。その甲斐あってか、日本はオマーン、UKとならんで **Certificate of Excellence award** を受賞することが出来た。自分は凜くんとソーラン節の担当になったのだが、本当に皆でまとまって、準備が出来たと思っていて、**Closing Ceremony** でも周りを圧倒できたかな、と思っている。

III. かけがえのない日本チームについて

APYLSでえられたのは、外国の友達だけではない。今回、日本チームとしてまとまって発表したり企画したりする機会はとても多かったけれど、それを乗り越えられたのは日本チームのメンバーがこの面子だったから。事前のコンタクトを密にしていたからこそ、逆に国際交流という面でもうまくいったのではないだろうか。Student Dialogueにむけてのたくさんの会議が功を奏した。期間中も、日本の中でのわだかまりもなく、今回が成功で終わった理由の一つだろうと思う。

IV. 最後に

“Leadership by Example”の意味を考えてみる。簡単ではない。行く前には何を指しているのかただ漠然としかわからなかった。ただ、様々な人が世界中から一堂に集まり、普段絶対しないような経験をする。それがその人、その国の中で経験として蓄えられていく。Example を、例、と訳してしまうのは味気ない。多様な経験をすることによって培われるリーダーシップ。こういう意味ではないだろうか。

今回の APYLS で、本当に色々なことを経験することが出来た。メンバーの一人として参加できたことを、誇りに思う。

そして最後に、速水先生をはじめとして先生方、APYLS という貴重な機会を与えてくださった方々、日本のメンバー、そして世界のメンバーに、感謝したいと思う。

ありがとうございました。

山下鈴乃

夢のような 10 日間だった。APYLS でした一つ一つの経験どれもが忘れられない素敵な思い出であり、確実に私を変えていった。色々な経験をし、色々なことを考えた。それは例えばこれからの英語教育についてであったり世界から見た日本についてであったり、今までは考えたこともないようなことばかりだった。まあほとんどの時間はそんな事忘れてひたすら楽しんでいただけ。

1. 他国の子との交流

日本には出会えなかったであろう子たちと国境を越えて広がった友情の輪が、APYLS で得た何よりも大きいものだった。特にルームメイトと麻布担当のファシル Kaishi のことは忘れない。私の部屋は 4 人部屋で、イギリスから来た Suyin、シンガポールの Wan Hui、オマーンの Raya と一緒だった。本当に各国の可愛い子を集めてきたんじゃないかというほどみんな可愛くて優しくて幸せだった(笑) 少し夜更かしして恋バナをしたり、日本語講座を開いたり、お菓子パーティをしたり。過ごしてきた環境が全く違う 4 人だったけれど、衝突することは一切なく楽しい思い出しかない。ただ、オマーンの子が絶食している最中はお菓子を全部片づけたりということはした。サミットの最初にも言われたのだが、お互いの宗教観を尊重するということはとても大切だから注意した方がよい。宗教観なんてそこそこ 10 日一緒にいるだけでは理解できないしできるとも思わないけれど、小さな気遣いをする事ならできると思う。少し戸惑うかもしれないけれど頑張ってもらいたい。今でも 4 人とは Facebook を通じてチャットをしたりして繋がっているし、一番仲良くなった Suyin とは文通もしている。Wan Hui はもしかしたら来年ファシルになっているのかな。そして麻布担当ファシルの Kaishi。彼女は Cultural Night Preparation の時に日本チームのお世話をしてくれたり、夜の Personal Time に若者の街みたいな所に連れて行ってくれたりした。何だか最初からすごく気が合って、色んな話をした。優しく面白くて頼れて素敵で手紙からは愛が溢れていてとにかく私は Kaishi が大好きなのです。彼女への愛を語りだしたらきっと止まらないからもうやめておこう(笑)

APYLS は世界中に素敵な友達が沢山できる最高の機会だ。ルームメイトやファシルが断トツで接する機会が多いのは確かだけれど、それ以外の子とも話す機会は沢山ある。ご飯の時、バスの中、移動中。一瞬一瞬を大切に、怖がらずに積極的に話しかけにいてみてほしい。きっとこんな素晴らしい体験は人生に一度きりなのだから。

2. プログラムについて

基本的にはシンガポールの企業、研究機関、政府関係施設を訪問する **External Visit** に目玉ともいえる **Student Dialogue**、これにお楽しみ要素が加わった感じである。

External Visit は楽しいものもつまらないものもある。個人的に最も楽しかったのは **Singapore Police Force** と **MediaCorp**。毎年行くと思われるのでお楽しみに。また、つまらないものといってもただ単に私が興味がなかっただけかもしれないし、頑張っけて聞いてきてほしい。大抵の場合は説明と並行してパワーポイントも流してくれるから、分からなくなってもそこから何となく推測できる。事前に下調べをしておくことは必ずしも必要ではないけれど、やっておいたらより楽しめるのではないだろうか。因みに私は一切しなかったので偉そうなことは何も言えません。

Student Dialogue は計3回あり、担当の国がプレゼンをしてからそれぞれに対する質疑応答、そしてグループに分かれて議論をするという流れだった。一番楽しくもあり難しくもあったのが最後の議論だ。ここでは一つの議題についてそれぞれの国の視点からお話を聞いたのがとても興味深かった。例えば私が **Health** について議論するグループになった時は、それぞれの国が抱える保健福祉に関する問題点をあなたの国は？そっちはどんな感じ？というように聞きあったりした。自分は日本代表なのだ！と気張る必要はないけれど、自分の言ったことがそのまま日本はこうなのね、と各国の子に受け止められるということは意識しておいてほしい。この時にいつでもついて回ったのが言いたいことを上手く言葉にできないもどかしさ、そしてたった一瞬でも気を抜いたら置いて行かれるという焦りだった。話している途中で「あ、これ何て言うんだろう」と詰まってしまう度に情けない思いをしたし、長い議論の間中ずっと気を張っているのは正直疲れた。ただ、辛く思ったところで英語力が上達するわけではない。これは早めに割り切って一生懸命伝えようと努力するしかないのだ。こちらが本気なら、あちらも本気で理解してくれようとする。一番いけないのは失敗を恐れ発言しないこと。とりあえず発言してみないと学べることは何もないのだから、積極的に参加してほしい。

さて、**Student Dialogue** に特別な思いがあるのは事前準備に一番時間をかけたということもあるだろう。3校の参加者が決まり次第週一でスカイプ会合を重ねた。更に距離的に近い麻布と筑附は何度かファミレスで会合を開いた。ここでは、決して妥協をしないということを中心に掛けてほしい。私たちのプレゼンは出発3日前に結論部に大きな変更を施すこととなり、スクリプト担当だった私は内心「まじですか本気ですかこの人達は！ここまでみんなの原稿を直してつなぎを調整して時間に合うように削ったりその他諸々がどれだけ大変だったのか分かっているのかうおおおおお」と思い暴れそうだったが、終わってみれば変更後の方がずっと良いプレゼンになったと満足している。因みに日本は二年連続で表彰された。これからも毎年表彰されて、ああ日本は常連だもんねーみた

いな扱いになってね。ね？笑

3. 英語力について

日本はどの国よりも、ずっとずっと英語ができなかった。日本ほど英語に苦労している国はなかったように思う。英語が公用語ではない国々の子どもペラペラだったことを考えると、やはり教育方法に違いがあるのではないだろうか。最近、小学生のうちから英語を学ぶべきか否かという議論をよく聞く。自国語をしっかりとし身に着ける前に外国語に手を伸ばすべきではないという反対意見もあるが、APYLS を通じて私はできるだけ早いうちから英語に触れるべきだと考えるようになった。日本の英語教育を否定するつもりはない。日本語を不自由なく使えるようになった上で正しい英文法を身に着け、正しく英語を使えるようになることは素敵なことだ。しかし、文法なんてあまり気にしないで純粋に英語を楽しみ、スピーキング力を重点的に鍛える教育を早くから行うことは大きな効果があると思うのだ。問題はこの教育を十分できる人材が不足しているということ。グローバル化していく社会の中で、日本にとってこの問題は避けては通れない大きなものだと思う。今の私はどうしたものかなあと良い考えが浮かばないままだが、これから先も次世代を担うものとして引き続き考えていきたい。

4. 麻布・下関との交流について

今年のチーム日本は本当に仲が良くて、衝突することもなく、一緒にいて居心地がいい最高の仲間だった。Foolish Japanese!!とか言っていていつも笑っていたけれど、やるときはやる素敵な集団。真面目なことにもくだらないことにも使ったメーリスの件数は 570 件にものぼったね。本当はいつだって真面目な宣翔、頼れる頭脳派直くん、壊れた時の面白さは他の追随を許さない隈井、愛すべき HSM バディー凜くん、何だか気の合う美咲ちゃん、第二の母なる千秋ちゃん、ムードメーカー多田、そしてぶつぶつ Foolish Japanese をいつもさりげなく方向修正してくれた和田っち。みんなみんな大好きだよ！今、APYLS をこんなに楽しい思い出として振り返ることができるのは、いつでもそこに彼らがいたからかもしれない。国際交流が目的とは言っても、こんなに素晴らしい日本の友達も増えた最高の経験だった。ありがとう。同窓会、絶対やりましょ。

5. 終わりに

APYLS への参加は私の人生を大きく変えた。日本で働こうと考えていた今までと違い、国際的に世界に貢献したいと思うようになった。APYLS では日本の高校生代表でしかなかったが、いつの日か本当の国際的リーダーになりたいと思う。そしてもし、ここで出会った仲間とお互いビッグになって、また世界のどこかで会うことができたなら、それはどれほど素敵で嬉しいことだろう。そんな思いを胸に、まずは目の前のこと全てに全力で向かっていこう。APYLS に関わった全ての人には、心から感謝の気持ちでいっぱい。シンガポールで過ごした 10 日間は、間違いなくこれからの私の原点となっていく。

下関西高校

河野凜

初めて APYLS について知ったのは高校一年生の秋頃、前回参加された先輩方の報告会の時だった。その時の僕の頭には、シンガポールとかいう国に行っているんな国の人たちと会って何かしてくるという認識しかなかった。中学生の頃、ほとんど英語を使わなかったものの、一週間程度アメリカでホームステイをしたこともあり、外国には興味を持っていた。今回も外国に行けるんだったら参加してみるか、とありえないくらい軽い気持ちで参加してしまった。しかし、僕の考えはとてつもなく甘かった。どうして何も考えずにこんなことをしてしまったのか本当に後悔した。自己嫌悪に陥ってしまうくらいぼろぼろになった。だけど、このサミットで得たものはとても大きなものになった。

サミット前の準備

外国に行って、外国人と交流するんだから、英語は相当練習しないといけないということは当然わかっていて、だけど、僕はそれだけでいいとしか考えていなかった。だから、プレゼンやパフォーマンスの準備などをしなきゃいけないって聞いた時には相当焦った。その時、下西のほかの二人は先輩方の報告会をちゃんと聞いていてプレゼンの存在を知っていたので、ますます僕一人だけが焦った。しかも、これからサミットまで会ったこともない麻布や筑波の代表の人たちと一緒に準備すると知り、とても不安だった。そして、毎週末の夜中の Skype が始まった。そこでプレゼンの内容を決めていく。みんな自分の意見を持っていて、その上相手の意見もちゃんと聞き入れている。話し合いもいつもテンポよく進んでいった。でも、はっきり言って僕は何もできていなかった。ちゃんとみんなみたいに自分の意見を言っていかなきゃとは思っていたけど、正直優秀な麻布と筑波の皆さんでやっちゃってくださいって思ったりして人任せにしているところがあった。みんなごめんなさい。でも、与えられた仕事はその分全力でやってきたと思う。ずっとバレエを習っていたので、みんなより優れているところといえば踊ることぐらいしかない。だから、ソーラン節の振り付けは去年よりも上を目指そうとめっちゃ考えた。逆に言ったらそれくらいしかできなかったんだけど…

APYLS のプログラム

サミット中、ほんとにたくさんのプログラムがあった。初日の Mass Interaction Session から始まり、Summit Dialogue や Arts Masterclasses のようなものまであった。どのプログラムもとても中身が濃く、充実した時間を過ごせた。その中でも、Student Dialogue は他のものとは比べ物にならないかった。

第一回目の Dialogue に参加したとき、衝撃を受けた。ほぼ全員が次々に手を挙げて、自分の意見を言おうとしているのだ。日本とは違くとよく言われているけど、まさかここまでの差があるとは思わなかった。そんな中、当然僕は発言ができなかった。英語がわからなかったからではない（日本

人にもわかるように議論はプロジェクターで表示されていた)。自分の意見が持てなかったからだ。日本にいる時も普段から周りに流されてる僕は、自分の意見が持てなかった。そんな自分が嫌いで直したいと思ってたけど、いっこうに直らず、結局自分でもそれに気づかないふりをするようになっていた。だけど、今回そんな自分の情けなさを目の前に突き付けられ、その日はほんとに悔しくて、辛かった。もうこんな思いはしたくないと思った。ここにいる限りこの現実からは逃げられない。だから、いま変わるしかないと思った。二回目までには無理かもしれないけど、最後の Dialogue までには何か言おうと決心した。すると、二回目にいきなり名指しで当てられた。これにはマジでビビった。だけど、拙い英語でしょぼいものだったけど、何とか意見を言うことができた。こんなじゃ、まだまだ変わることができたと言い難い。だけど、APYLS に参加したおかげで、変わるきっかけにはなったと思う。これからこのような機会に巡り合えるようなことは少ないだろうけど、少しずつ変わっていきたくて強く思った。

APYLS 参加者との交流

一番言いたいことは、満足のいく会話がほとんどできなかった、ということだ。当然会話は日本人といるとき以外はずっと英語だ。僕も行く前からある程度は覚悟していた。自分の言いたいことが言えないことや、相手の言っていることが聞き取れないことは多いだろうとは思っていた。…とは言いつつ、やっぱり頭のどこかで何とかなると思っていて、現地でいざ外国人と会話してみると、ここどこ？ほんとに英語を話してる国に来たの？って思った。最初は全く聞き取れなくて到着早々焦りまくった。助けを求めようにもやっぱり英語でしか求めることができない。マジでやばいと思っていたら、僕と話している人が僕は英語が苦手だと察したみたいで（英語が苦手なやつがこんなところに来るなよって感じだったけど）ゆっくりとわかりやすくしゃべってくれるようになった。これにはほんとに感謝したが、こんな調子じゃ参加した意味がないと思い、次からはできる限り相手の言っていることに耳を傾けるようにした。そのおかげで、何とか聞き取れるようになった。

日常会話ができるようになるまでは、話の話題がわからないし、とてもつまらなかった。でも、コミュニケーションが取れるようになると、みんないい人ばかりでとても会話が楽しくなった。それからは一日ごとに友達を増やしていこうと思い、いろんな人に話しかけるようにした。バスの中で隣になった子の趣味を聞いたり、相手の国と日本の違いについて話してみたり、日本語に興味があるということで日本語を教えたりした。日本の文化に興味を持っている人は大勢いて、特に漫画やアニメが好きな人が結構いた。ルームメイトでシンガポール人の Lionell とはデスクトップやナルトについていっぱい語った（勉強ばかりもいいけど、マンガ読んでたらこういうところで役立つよ）。なかにはテレビ番組の“ガキの使いやあらへんで”が好きなアメリカ人がいて、一緒に見てめっちゃ笑った。その時、初めて笑いは万国共通だと身をもって知った。

こんな感じで、外国の人とはかなり苦労したが仲良くやれたと思う。出会えてよかったと思う人にいっぱい会うことができた。だけど、一番出会えてよかったのは、日本のみんなだ。Skype で準備してた時は頭よくて、少し嫌味な人ばかりなんだろうなとか思ってた。ほんとにみんなごめんね。みんな最高だった。会ってすぐに打ち解けることができたし、苦しいときは互いに助け合って、

楽しいときは一緒に笑って、暇なときはみんなでワイワイ騒いで、たった十日間だけどもめちゃくちゃ濃い時を一緒に過ごせたと思う。ほんとに短い期間だったけど、まるで昔から仲が良かったみたいになんでも話せる友達もできた。こういう場ではあまり日本人同士で固まらない方がいいという人がいるけど、そんなことない。もちろん、せっかくの機会だし、外国人と積極的に交流することも大事だ。だけど、英語が話せない日本人が圧倒的に不利な状況のなかにいるからこそ（話せないのは僕だけだったかもしれないけど）、日本人同士が協力し合い絆を深めあうことも大切だと思う。もう一度、みんなごめんね。会う前は変なイメージ抱いてた。みんな最高だったよ。

最後に APYLS に参加という素晴らしい経験をさせてくださった方々、事前準備など協力してくださった先生方、先輩方、応援してくれた友人、いつも見守って協力してくれた家族のみんな、全員に心から感謝したい。本当にありがとう。

金城美咲

私は APYLS を通じて多くの挫折を味わい、そしてその分多くの収穫を得ることができた。この作文では、主に英語力について触れていこうと思う。

1. 初めの衝撃

行く前は、このサミットがこんなに自分の意識を変えてくれるとは思ってもみなかった。ただ単に英語漬けの生活を体験するというくらいにしか考えていなかった。少くくは英語を勉強しておかなければ、と単語帳を見たり CD を聴いたりしてはみたものの、なんとかなるだろうとあまり真面目に取り組んでいなかった。日本チームとの Skype 会議でも、まだ顔を合わせていなかったからか、いまいち溶け込めなかった。

しかし実際に行ってみると、自分の考えがどれほど甘かったかということを感じさせられた。行ってすぐに、英語の壁にぶち当たった。とにかく速くて聞き取れない。また英語を話そうと思っても、会話の中ではスピードが求められるために簡単な表現でも上手くできない。そしてこうした困難は英語だけにとどまらなかった。外国人ならではの雰囲気になかなか馴染めなかったのだ。日本にはわりと静かな人が多く、文化的にもそれを善としている。でも外国人は違った。オープンな性格で、初対面の人でもまるで親友であるかのように話しかけてくる。私は圧倒された。そして段々、外国人たちの会話に入ることが怖くなった。自分から壁を作ってしまった。

そんなときに支えとなってくれたのが仲間である日本人だった。APYLS では、ネイティブの人はもちろんのこと、英語を母国語としない国からの参加者も、普通に英語を話していた。私のルームメイトはオマーン人で、「よし、二人部屋だし、相手も英語が母国語じゃないから大丈夫！」と思っていたのに、彼女もまたペラペラだったのだ。もはや英語が使えなくて悩んでいるのは日本人だけであった。だから、日本チームの結束力はすぐに強いものになった。私たちはお互いの気持ちを共有し、英語で分からないところがあれば助けあった。もっとも、私は常に助けをもらう立場であったが（笑）。この時期の私にとっては、日本人と話す時だけが唯一気を楽しませてくれる時だった。

しかし私たちは決して、英語を使わなくても済むからといって楽なほうに流れ、いつも固まっているわけではなかった。助け合うとともに、お互いに高めあったのだ。私はそのおかげで、外国人に話しかける勇気を持つことができた。

2. 英語の壁への挑戦

積極的に外国人と話そうと思い始めた私は、まず移動中のバスの中で外国人の隣に座るように心がけた。バスでは二人だけで話せるため、話がどんどん進んでいくこともないし、友達になるには絶好のチャンスだと思ったからだ。私はできるだけ色々な人と隣に座るようにした。すると外国人は皆、そんな私に優しく接してくれたのだ。私がなかなか英語に変換できなくて困っていると、言いたいことを推察して教えてくれた。また私のつたない英語に一生懸命耳を傾けてくれた。こうして成り立っていった会話では、非常に興味深いことを知ることができた。中国人からは漢字について色々教えてもらえたり、オマーン人からはオマーンの気温が夏には50度近くにまで達することも知った。また各国での教育事情についても知ることができた。

私はこのようにしてどんどん友達を増やしていったのだが、大事なのは、英語ができないからといってすぐに殻に閉じこもるのではなく、分からないときは分からないアピールをして、助けてもらいながらも積極的に話そうとする姿勢を持つことだと感じた。

バスでの会話から始まった私の挑戦はまだまだ続いた。Student Dialogue の Discussion での発言だ。一回目は、話していることは大体わかっていても自分の意見をまとめているうちに次の話題に移っていて、結局発言できずに終わってしまった。その時はとても悔しかった。と同時に、次こそは絶対に発言しようと強く誓った。そして二回目、私はその日の議論の内容を予習してそれに挑んだ。その甲斐あってか、一回目よりも聞き取れたし、話についていけた。また二回目からは、ありがたいことに facilitator が、皆が出した意見を箇条書きにして画面に映し出してくれたのでさらに内容把握が容易になった。おかげで私は二度も発言することができた。友達になったイギリス人から「頑張ったね」と言われたときには、涙が出そうになった(笑)。

それからは、英語を使おうと挑戦することが段々楽しくなってきた。毎日何かしらの目標を立て、それを実行するようになった。このように常に目的意識を持つことが、自らをよりよい方向へ導く最良の方法だと思う。

3. 努力の裏

英語の挑戦を続けているうちに、自分の頭も少しは英語脳になったのだろうか、ゆっくり話してくれているとはいえ、相手の話していることが分かるようになってきた。また、言いたいことが前より速く口に出せるようになった。そして友達も増えた。バスの中では、自分から「ここに座ってもいい？」と聞かなくても、「ここに座って！」と言ってもらえるようになった。さらに英語で冗談を言い合ったりもした。私は冗談を言って人を笑わせることが好きな性格なので、英語でも自分の性格を表に出すことができ、相手にお腹を抱えるほど笑ってもらえたことは本当に嬉しかった。

日本人のメンバーと会ってお互いの状況を語り合うと、外国人との会話が話題に上ることが多く

なった。これは、英語ができないからといって弱気になることなく、お互いに鼓舞し合ったからであらう。

4. APYLS を通じて学んだこと

これまで英語への挑戦を通じて学んだことについて述べてきたが、私が APYLS から学んだことは他にもたくさんある。中でも一番印象に残っているのは、日本人がなかなか持ち合わせていないような能力を、外国人は皆身につけていたということだ。

例えば自己表現力だ。今回、自分の意見を求められる機会がたくさんあったが、その際外国人は適切な長さで、なおかつ確かに自分の主張を述べていた。準備時間がほとんどない Student Dialogue の最後のスピーチでも、まるで前々から考えていたかのように実に素晴らしいスピーチを展開していた。「情報を上手く処理し、それを的確にまとめ、表現する」という能力は簡単には身につけることができない、難しい業だ。しかし彼らはこの力を十分に備えていた。

また、外国人は積極性も持ち合わせていた。彼らはサミット中、どんな時でも物事に積極的に取り組んでいた。質疑応答の時間にはいつもたくさんの手が挙がり、色々なことを知りたい、学びたいという姿勢が見て取れた。

このように外国人は日本人にはない能力を備えていた。しかし、これらの力はどれもこれからの社会において必要とされるものではないだろうか。近年、各国でグローバル化が進んでおり、巷では「国際人」という言葉がささやかれるようになった。この国際人というものは、まさに私が APYLS で必要性を感じた、英語力、自己表現力、そして積極性を身につけている人のことだろう。英語はただのコミュニケーションのツールでしかないという人もいるが、英語ができなくても意思の疎通ができるのは日常的な会話だけであり、仕事などで必要となる時は、やはり英語力がなければ十分なコミュニケーションを図ることができない。これから私たちは、もっとこれらの力を身につけていかなければならない。

APYLS によって私は一回り大きくなれた。今回このような機会に参加できたことに感謝したい。

岡本千秋

英語なんて、授業でしか習ったことないですし、日本語を学んだ年月と比べるととても短い、学習をはじめたたったの5年の私。

英語ってなんだろう、どうすれば仲良くなれるのか、頑張るだけじゃだめなんだけどな…、色々なことを考えた11日間でした。

飛行機に乗るときも、物心ついてからは初めてだったので、緊張しました。恐らく、他の日本の参加者は何回も経験しているだろうから、私は人一倍不安が多かったのかもしれませんが。

実は外国人とは、ALT を除けば喋ったこともない、そして、外国に行くのは初めての経験でした。小さい頃は日本が大好きで、「絶対日本からは出ない。外国怖いやん…」と言っていたほどです。しかし今回は、「すごい経験ができる」「絶対に成長できる滅多にないチャンス」と思い、選考に参加

し、ありがたいことに、そのチャンスを得ることが出来ました。

いろんな人から「ご飯が不味い」、「水が飲みたくない味」、「変な虫がいる」など、"悪い噂"を聞き、不安に思った日もありました。「私は、そんな恐ろしいところで何ができるのか」、これが私の出国前の気持ちでした。出国前に、色々考えて自分の英語が全く通じない最悪の場合、体調が途中で悪くなった場合、などの対処法を考えることで安心しようともしました。

しかし、実際に参加してみると、

APYLSはその恐怖感を、新たなものを見つけることができるワクワク感に変えてくれました。

APYLSは人と話すのに一々勇気のいる臆病な私に、人の優しさを教えてくれました。

APYLSは自分の非力さ、やらなければならないことを教えてくれました。

まさに、APYLS changed me a lot.

ただいるだけでは、もったいない。それは、出国前から感じておりました。そして、行動しなければ何も始まらない。それが、APYLSで学んだ一番のことだと思います。

例えば英語を話すこと、それだけで見ても色んなことを考え、実行していきました。自分から話しかけるには勇気がいります。何度も聞き返してしまうことへは申し訳なさ、英語が伝わらなかったらという恐怖は、初めのころは、どうしても拭えませんでした。英語で話すこと、つまり言葉を使うことは日本語ではあるけれども毎日しています。同じ「言葉を使う」ということなのにどうしてこんなに言いたいことを言えないのか、という絶望感に苛まれたこともあります。

しかし、ウジウジ考えたって何か変わるでしょうか。それよりも、割り切ってどんなにうまく伝えられなくても、とりあえず話す。言葉が不自由なら絵を使ってでもいいから、相手とコミュニケーションを図ろうとした方がいいのではないのでしょうか。発言はしたものの支離滅裂で、つまりすぎな英語しか話せない自分にじれったさを感じた、一回目の Student Dialogue の後にやっと気づくことが出来ました。

出国前に、友人からもらった「死なない程度に恥を知って来い」という助言はこういうことだったのか、と自分を成長させるために必要なものが分かったように思います。

気づいた後は、まったくそんな気持ちじゃなかったと言えば嘘になりますが、楽しくお喋りができるようになったと思います。そのなかでも、前に行かれた先輩から受けたアドバイスにもあったように漫画やアニメの話は、本当に盛り上がる事ができます。『テニスの王子様』『黒子のバスケ』や『ドラゴンボール』などの少年誌の話は私も好きで、携帯電話に画像を入れていたのでそれを見て「同士っ!!」と更に仲良くなれたと思います。また、写真を撮るときも、アニメのキャラクターのポーズをしたり、今でもメールで漫画やアニメの話をしたり、日本のサブ・カルチャーを好きでいてよかったなと思います。

また相手から話しかけられたときの返答も、分からなければ文字としてノートに起こしてもらい理解するというやり方をとりました。相手に迷惑をかけるかもしれないが(面倒臭かったと思います)、コミュニケーションをとる上で、相手が何を言ったのか理解しようとしなくて”I’m sorry but I can’t catch what you said.”と言って会話のチャンスを潰すよりもいい方法なのではないかと思い、粘りました。(Miya, Holly, Pia, 何回も聞いたけど嫌な顔一つしないで教えてくれてありがとう！)

また外国の友達と過ごしたことで、楽しく生きるコツ、人を喜ばせるコツがわかった気がします。同年代の若者のはずなのに、もうすでに「自分」が確立していて、そして自信がありました。こんなにも円熟無礙な人々には初めて会ったし、とても輝いて魅力的に見えました。多分、多くの人が挙げると思うが、「表現力」というこれからの社会で生きるために不可欠の力が十分に備わっていました。自分を魅せる、場の盛り上げ方、相手を許すこと、どこをみてもエンターテイナー並の気遣いとカリスマがあったように思います。

そんな素敵なお人々と仲間になれたことは素晴らしいことだと思います。今でも Facebook、Skype、メール、そしてアナログですが手紙、と様々なところでつながっています。本当に一期一会。まさに、千載一遇。大切にしていきたいです。

APYLS に参加するためにどれだけの費用、手間、時間がかかったでしょうか。感謝している、ありがとうというものの、いろんな人に支えられていることを改めて実感することができました。参加して、悪いことなんてまったくない。寧ろ、プラスばかりでした。

こんな素敵な機会にめぐり合わせてくれた、すべてに感謝します。支えてくれた先生方、家族、友達、新しくできた仲間みなさん、ありがとうございました！！

次に参加するみなさん、本当にいいチャンスを手に入れましたね！楽しんできてください。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。長い間見守ってくださった方々やこれからAPYLSを経験できる後輩たちにむけてこの文集を製作しましたが、これがもっとたくさんの人が留学について考える機会にもなれば嬉しいと思っています。

Asia-Pacific Young Leaders Summit 2012 報告文集

2013年1月19日 発行

執筆者（あいうえお順）

岡本千秋（山口県立下関西高等学校）

金城美咲（山口県立下関西高等学校）

隈井亮太（麻布高等学校）

河野凜（山口県立下関西高等学校）

酒井直（麻布高等学校）

多田誠之郎（筑波大学附属高等学校）

野辺宣翔（麻布高等学校）

山下鈴乃（筑波大学附属高等学校）

和田大夢（筑波大学附属高等学校）

編集 野辺宣翔

連絡先 麻布高等学校

〒106-0046 東京都港区元麻布 2-3-29

電話 03-3446-6541

